

テモテへの手紙第 I、5 章です。アウトラインからもう一度振り返りたいと思います。1 章は『教会とそのメッセージ』。2 章・3 章は『教会とそのメンバー』。4 章は前回の内容でした。『教会とそのミニスター』。ミニスターというのが聖職者又はプロテスタントでは特に教役者と言います。単純明快な意味は“仕える者”です。しもべということです。で、今日から見る 5 章以降です。5 章と 6 章。それは『教会とそのミニストリー』であります。全部英語で言いますと“M”で、教会と“M”で始まる単語でアウトラインを構成しました。もう一度言いますと、1 章は『教会とそのメッセージ』。そのメッセージは単刀直入にイエス・キリストであります。イエス・キリスト以外の違ったことを教えるはいけません。で、2 章・3 章は『教会とそのメンバー』です。メンバーは男女混合です。それぞれがそれぞれに与えられている役割また賜物があるわけです。立場やまた秩序というものがあるわけです。それらをしっかり守って教会内に混乱の無いように。そして 4 章はその教会で仕えるしもべたち、『教会とそのミニスター』であります。特に牧会者のことも“ミニスター”と言うわけですが、テモテがエペソ教会の若き牧師だったということは既にお話した通りであります。で、5 章・6 章が『教会とそのミニストリー』であります。5 章は特に教会の中におけるミニストリーであります。で、6 章は教会の外です。教会内と教会外です。又は別の言い方をすると、5 章が教会。で、6 章は社会におけるミニストリーとも言えるでしょう。

で、早速 1 節から見ていきたいと思えます。『教会とそのミニストリー』です。『1 年寄りをしかってはいけません。むしろ、父親に対するように勧めなさい。若い人たちには兄弟に対するように、²年とった婦人たちには母親に対するように、若い女たちには真に混じりけのない心で姉妹に対するように勧めなさい。』第 1 テモテの 3 章 15 節では、『教会は神の家である。』というふうに表現されていました。教会は“神の家”、若しくは“神の家族”であると。ですから『教会とそのミニストリー』は、“神の家族の中での働き”と言えるでしょう。そこには老若男女が集まって来ます。年寄りばかりの教会ではありません。また若者ばかりの教会ではありません。教会というところは、家族の集まりですから、特定の人たちが集まるようなところではありません。家族というのは特定の人の集まりではありません。おじいちゃんもおばあちゃんもいれば、お父さんもお母さんもあれば、そして息子・娘・孫たち、またひ孫たち。いろんな家族のメンバーで構成されているわけであります。教会もそういうところでなければいけません。年寄りばかりの教会で若い人たちが中々集えないとか、その逆に若い人たちばかりの集まりで年寄りが中々近付けない。そういうものであってはならないということです。勿論教会の中でそれぞれのグループ分けをして、男性のミニストリー、女性のミニストリー、子どものミニストリー、若者たちのユースのミニストリー。いろいろそこでのグループ分けによる特化したミニストリーも勿論大事でありますけれども、ただそれに教会全体が特化してしまっ、「この教会は若者の教会である。」とか、「この教会は年寄りの教会である。」「この教会は女性たちの教会。」とか、「男性たちの教会。」あつてはならないということです。むしろ、家族であるということを忘れてはいけませんから、どなたでも歓迎される場所。誰でも居心地が良いところ。年寄りも大事にされます。『年寄りを、年配者を、年長者をしかってはいけません。』とあります。テモテは特に若い牧師でありましたから、どうしても若気の至りに陥ってしまうこともあったでしょう。若いから勢いがあります。でも勢い余ってということもあるでしょう。又、血気盛んでもありますから、それが血気にはやってしまう、ということもあったでしょう。若いですから意気込みもあります。でもそれが生意気になるということもあるでしょう。ですから若いテモテに対して『年寄りをしかってはいけません。』ただ“叱る”と言っても、ギリシャ語では『厳しくしかる』とか『手厳しくとがめる』という言葉が使われ

ています。年寄りも勿論誤るわけです。間違ふこともあるわけです。罪に陥ることもあるわけです。「もう年だから仕方がない。大目に見よう。」とか「水に流そう。」ということにはならない話もあるわけですが、でも特に年寄りに対して、年長者に対しては、敬意を払って、厳しく叱るとか、上から目線で厳しくとがめるようなことがあってはいけません。特に原語では、これは強意の、強い意味の動詞が使われております。ですから、むしろ**ガラテヤの手紙**にもあるように柔和な心で正してあげることが必要だと思えます。自分よりも年長者に対してはちゃんと敬意を払って、リスペクトしなさい。

で、**レビ記 19 : 32** もここで参照して頂きたいと思えます。『**あなたは白髪のある老人の前では起立し、老人を敬い、またあなたの神を恐れなければならない。わたしは主である。**』旧約聖書にも年寄りを、年長者・年配者を敬え、とあります。私の友人に韓国人の人がいまして、彼はお父さんが家に帰ってくると、ソファに座ってテレビを見ている、すぐに立ち上がってお父さんに対して「おかえりなさい」というような挨拶をして、自分と同じような年なのに随分礼儀正しいなという印象を持ちましたけれども、韓国では儒教の教えも浸透していますから、目上の人に対しては明確な態度を持ってしっかりと敬うということを経験として持っているということ、目の当たりにしたわけですが、日本もかつては勿論儒教によって上下関係も大変厳しく教えられていたわけですが、でも私たちは聖書において年配者に対して、自分よりも年の上の者に対しては、しっかりと敬意を払うように。これは律法の中にも命じられていますし、新約聖書の中にも敬意を払うようにということは度々言われているところであります。パウロは愛について定義する際にも、礼儀に反することをしない、と言っております。**第1コリント 13章**に、愛の定義があります。『**愛は寛容であり、愛は親切です。**』というその行の中に、『**愛は礼儀に反することをせず**』と。ですから、私たちは神の家族の共同体として、自分よりも年の上の人に対しては特に礼儀に反することをしてはいけません。愛しているならば、その年寄りがどんなに弱い者でも、どんなに面倒やトラブルばかりを起こすような人であったとしてもです。

で、若い人たちに対しては兄弟に対するようにと言われております。使徒ヨハネは手紙の中で『**兄弟を愛さない者は、神を愛さない者である**』と明言しております。若い人たちの中には確かに自堕落な者や、又、いい加減な者や面倒ばかりを起こすトラブルメーカーもあるかもしれません。なっていないというような、「最近の若者はなっていない」というような、そういう人たちもあると思えます。でも彼らのことを、もし主にある者ならば、兄弟として自分の正に弟のように、又、兄のようにして接する必要がある。もう一つ忘れてはいけないことは、教会は神の家ですから、神の家には父なる神様がおられるわけです。父なる神様は、私たちのお父さんは、家族が仲良くあること。兄弟喧嘩しないで、憎み合ったり反目しあったりせずに、愛し合って仕え合っていくことを、お父さんは望んでいるわけです。ですから私たちは、お父さんが喜ぶこと、お父さんが望まれること。たとえ自分が気に食わなくてもです。それが自分にとって負担だと思ってもです。それでも私たちは兄弟に対するように接する必要があります。叱るんじゃなくて、勧めるということが繰り返し言われています。

また**2節**のところには『**年とった婦人たちには母親に対するように、**』やはり叱るんじゃなくて、むしろ勧めるように。叱るだけで勧めをしないというケースもあるでしょう。“勧める”という言葉は前にも何度も見えておりますけれども“パラカレオ”(“parakaleo”)というギリシャ語で、『そばにいて援助する』という意味です。そこから転じて“勧める”だけじゃなくて、“励ます”とか、また“慰める”。そして、“戒める”という言葉も勿論含まれるわけです。この“パラカレオ”は“パラクレイトス”の語源でもあって、“パラクレイトス”は『助け主』聖霊の別名を指すわけです。正に聖霊のようにそばにいて勧めなさい。そばにいて励ましなさい。そばにいて戒めたり、助けたりしなさい。それが“勧める”という言葉です。上から目線でただ厳しいことを言い放つのではなくて、しっかりと寄り添って、そばにいて、彼らが正しく物事を考え、正しく行なっていけるように、援助しながら助けてあげるわけです。それが“勧める”とい

う言葉です。

で、特記事項として『若い女たちには（特別な言葉が使われております。他にない言葉です。）真に混じりけのない心で姉妹に対するように勧めなさい。』単に「姉妹に対するように勧めなさい。」ではなくて、その前に『真に混じりけのない心で』という特別な言葉がここには付記されています。この『真に混じりけのない心』と同じ言葉が4章12節にも使われておりました。それは『純潔』という言葉です。英語では“pure”という言葉です。“ピュア”というふうにも日本語で和製英語にもなっています。“ピュア”というのは『真に混じりけのない心』、『純潔』ということです。若い女性たちに対して、姉妹のように接するということは、通常自分の妹やお姉さんや考えれば分かると思いますが、情欲の目で自分の姉とか妹を見ることはないと思います。誰でも情欲の目で女性を見るならば、異性を見るならば、心の中で姦淫を犯したと言われるわけですが、通常自分の肉親であれば情欲の目で見るなんてことは普通ないわけです。これは通常な話です。異常な場合はあるわけですが、性的倒錯者ということになると、または近親相姦者ということになると話は別ですけれども、通常であれば姉妹に対してそのような情欲の目で見るということはなく、むしろ真に混じりけのない心、ピュアな心で接するということです。ですから、あくまで姉妹に対して私たちはアガペーの愛をもって接するわけです。若しくはフィリアの愛（兄弟に対する愛です。）エロスの愛で接してはいけないということです。気を付けたいと思います。若い女性たちはあなたの姉妹でもあり、同時に神の娘でもあるということです。兄弟は神の息子でもあるということをお忘れはいけません。しっかりとリスペクトして頂きたいと思います。ただパウロが意図的に、この若い女性たちに対しては、『真に混じりけのない心』という言葉を入れているのは、教会の中でいろいろなトラブル、スキャンダルが既に起こっていたということを示唆しているわけです。「姉妹ですから、仲良くして、親しくして、一緒に祈りましょう」とか。又いろんな相談にのって、いわゆるカウンセリングなんてことをしているうちに、一対一の関係になっていくうちに、段々親密な関係に入っていきわけです。「この人は私のことをよく分かってくれている。話もよく聞いてくれる。よく相談にのってくれる。親身になってくれる。」そのうちに姉妹の一线を超えていくわけです。アガペーの愛が、フィレオの愛が、いつの間にかエロスの愛に転じてしまうわけです。このような誘惑が既に教会の中で多く見られ、そして失敗者も、実際にスキャンダルを起こしてしまう人たちも後を絶たないというのが、もう既に一世紀のこの教会に見られていたということが示唆されているわけです。気を付けたいと思います。私は皆さんにも何度となく言っていますが、特にこの教会では、男女が一対一になるようなシチュエーション。公のパブリックな場であれば勿論男女が話しても構いません。当然のことながら夫婦であれば何の問題もありません。肉親であれば何の問題もありませんが、ただオープンスペースで密室にならないように、そういう場であれば男女が、異性同士が実際に話をしたり、いっしょに祈るといことは問題はないわけですが、でも一対一になるシチュエーション、気を付けたいと思います。“カウンセリング”という名のもとに、又は“祈り合う”という美名のもとに、そういうふうな男女が一対一になってもいいと、そういう誘惑を避けなくてははいけません。当然これは教会の中だけではなくて、外でもいっしょです。結婚もしていないのに、男女が一緒にどこかのレストランか何かでとか、又ドライブをしているとか、そういうシチュエーションも誤解を生むこともあります。「そんなことを私は気にしません。全然そんな良からぬ思いを抱くなんてことは、私においてはありえません。」とそういう人もこの中にはあるかもしれませんけれども、あなたが良くても相手はそうは思っていないかもしれませんし、又他の人がそれを見たならばどうでしょうか。つまづくかもしれません。実際にまさか、ということがこのスキャンダルの中に必ず見られるものですから、考えられないような、全く想像のつかないようなことが起こるわけです。まあ、その弱さを私たちも認めた上で、予防していく必要があります。『真に混じりけのない心で』姉妹に対して接することを務めていく必要があります。

で、3節。『やもめの中でもほんとうのやもめを敬いなさい。』“やもめ”というのは、いわゆる未亡人で

す。“寡婦”とも言います。当時のやもめ・未亡人は夫を失うことで生活の基盤を失ってしまったわけです。文字通り大黒柱を失って、生活の術を失うわけです。路頭に迷ってしまうわけです。なぜならば当時は年金なんてものもありませんし、生命保険なんてものもありませんし、社会保障なんてものも無かったわけです。夫が死んだら、もう妻は路頭に迷うしかない。それが当時の状況だったわけです。生活保護も受けられません。社会福祉システムなんてものも当時は無かったわけです。ですから、そのようなやもめたちを教会が援助する、サポートするということが必要になってくるわけでありまして、これは初代教会から既に始められていたことであります。使徒の働き 6章1～6節を見て頂きたいと思えます。最初の教会、エルサレム教会の姿です。『¹ そのころ、弟子たちがふえるにつれて、ギリシヤ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情を申し立てた。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給でなおざりにされていたからである。² そこで、十二使徒は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。「私たちが神のことばをあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。³ そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。(この七人が後に教会の執事となっていく人物です。中に有名なステパノとか、伝道者ピリポもあるわけです。で、十二使徒たちは、4節で) ⁴そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。」』このような教会の実務にとらわれて、祈りと御言葉の奉仕がなおざりになってはいけません。後回しになってはいけません。そこで実務を担当する七人の執事が選ばれていくわけがあります。で、その執事についても第1テモテの既に3章のところ、その資格・その役割といったものも見てきたわけです。で、このようなやもめたち。いわゆる今日の社会的弱者をサポートするのは教会の務めであったということ。初代教会から見る事が出来るということを行いました。でもさらに逆上ると、そのようなやもめたち・社会的弱者は既に旧約聖書の中で律法の規定としてイスラエルの民は彼女たちをしっかりと養い、守っていくように。これは聖書を貫いて言われていることですから、教会において初めて行われたことでもないということです。既に古代イスラエルにおいて始められていたことで、それは当時してみたら全く聞いたこともないような話です。今日の社会福祉システムの基盤はすべて聖書からきています。教会由来のものがほとんどであります。で、さらに教会由来のものを逆上って考えれば、それは旧約聖書の古代イスラエルにまでその起源をたどることができるわけです。つまり聖書の中にすべてを見出すことが出来るわけです。

で、話を戻したいのですが、もう一つヤコブ 1:27。『父なる神の御前できよく汚れのない宗教は (ピュアな宗教は)、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることです。』“父なる神の御前できよく汚れのない宗教”これが真のキリスト教です。その真のキリスト教では、孤児や、やもめたちも困っているならば世話をするものである。社会的弱者を世話する。これは教会の務めです。で、パウロはテモテに対して、そのような真のやもめたちを、本当に困っているというやもめたちを敬いなさいと。当時は彼女たちのようなやもめは見下されていたわけです。参考までに『テモテ』の名前の意味は、『神を敬う』という意味です。この5章において、年寄りも社会的弱者です。また年寄りも敬うように。で、やもめのような弱者も敬うように。まあ、テモテは名前の如く神を敬う者であって、そして神を敬う者は、神の家族も敬う者。特に神の家族の中でも弱い者たちを敬う者。パウロは、「教会はキリストのからだである。」とも言いました。それぞれがからだの器官であると。で、ことさらからだの器官の中でも弱いもの、目立たないもの、影にあるものをパウロは尊ぶようにというふうにも説いているわけです。神を敬う者は、必ず神の民を敬い、神の家族を敬い、特に神の家族の中で、最も弱い者を敬う者であります。

日本において社会的弱者と言えば勿論、高齢者とか、身体障害者とか、又いわゆる孤児、難民もそうです。貧困層全般です。それを社会的弱者と言います。必ずしもやもめが、未亡人・寡婦が弱者とは限らな

いわけです。ただ、パウロの時代は、やもめというのが典型的な社会的弱者だったわけですから。孤児もそれに並ぶということです。彼女たち、孤児たちには、何の支えもなかったわけですから。ですから、神の民が、教会が彼らの支えとなって、神様がどういうお方なのかを代表して証しをしていたわけですから。ですから、神がどういう方かを示すのが教会の務めであり、神は弱い者を憐れんで下さいます。支えて下さいます。日本には母子及び寡婦福祉法という法律があります。また、全国母子寡婦福祉団体協議会（これは財団法人です。）そうしたものがあつたので、やもめとなつても、寡婦となつても様々な支援を受けることができます。日本の単身家庭の数、いわゆるシングルマザーとか、シングルファーザーとか言いますけれども、1人親家庭というのが、母子家庭では122万5,400世帯あるそうです。これが最近の数字です。で、父子家庭では17万3,800世帯あるということです。まあ、それは全体の世帯数に対して、割合で見ると母子家庭は全体の2.7%、父子家庭は全体の0.4%です。ちなみに日本のプロテスタントの人口は、人口比に対して0.2%以下であります。ですからプロテスタントの家庭よりも、父子家庭の方が倍も多いわけですから。母子家庭はその何十倍ということです。ただ、日本の現状ですとこのような単身家庭、1人親家庭の最大の要因となつてゐるのは離婚であります。死別ではありません。伴侶に先立たれて母子家庭になりましたとか、父子家庭になりましたと言うよりも、離婚が原因です。離婚といつてもその最大の理由は、性格の不一致です。もうこの人とはやっつけられないからと言う程度の話です。その結果子供達が悲しい目に遭つてゐます。深い傷を負つてゐます。あつてはならないことですが、これが現実であります。で、これに対して教会はどのように対応したらいいのか。それが今日のテキストを通して問われてゐるところであります。

で、もうひとつ興味深いデータとして、母子家庭の内生活保護を受けた家庭では子供の4割が成人後に生活保護を受けてゐるということです。これも残念な数字です。母子家庭の内生活保護を受けた家庭では子供の4割が成人後に生活保護を受けてゐる。これは身体に障害を負つて病気になるまで自分で生活を営めないから生活保護を受けてゐるというよりも、むしろ精神的なダメージによるもの。もう社会にも出られない、自立もできない、と言うケースも多いと思つてゐます。ちなみにこの生活保護の受給者は、戦後は、第2次世界大戦後は当然貧しい時代があつたわけですから。そのときには200万人を超えてゐたということです。でもその後高度経済成長によつてその受給者数は目減りしてどんどん減つてゐたわけですから。ところが1990年代から、バブルが崩壊してから景気が悪化しまして、1999年には再び生活保護の受給者は100万人に達しました。で、東日本大震災のあつた2011年には半世紀ぶりに生活保護の受給者は200万人を突破したということです。で、今年2013年には過去最多、これはもう11カ月連続に増えているということですが、先月の6月のニュースに216万1,053人の人たちが生活保護を今受けてゐるということです。それが今の日本の実態であります。教会の中にも勿論そういう人たちがいても不思議ではありませんし、そういう人たちが押し寄せてきても不思議ではありません。

で、話をもう一度戻したいと思つてゐますが、教会は社会的弱者に対してどのように接して、そしてどのような役割を果たすべきなのか。今は年金もありますし、社会福祉システムもありますし、社会保障というものがあるわけですから、当時の2000年前の教会と全く同じことを教会がなして行くとは限りません。ただ、ここでパウロが指摘してゐるのは、本当のやもめとそうでないやもめがいるので、教会はそこをしっかりと見分けて、そして効率の良い効果的な支援をするように。教会といつてもすべての教会が経済的に余裕があるわけではありません。ですから教会もある意味で貧しいところであるわけですから。でも、貧しいから何もしないでも良いという言い訳にはならないということです。貧しいながらもしっかりと本当に支援が必要なやもめを見分けて、そしてそのやもめたちには教会全体を上げてサポートすべきである。やもめとは限定されなくても、孤児であつても、もう生活の手段がない、本当に食べるのに困つてゐる、困窮してゐるそういう人たちを教会はしっかりとサポートしなくてはならない。その中でちゃんとターゲットを神様が与えて下さいますので、支援の必要がない者に無駄なお金を使つてはいけないということです。

限られたリソースを有効に活用していくことがここでも勧められているところであります。

で、**4 節**に目を移して頂いて『しかし、もし、やもめに子どもか孫がいるなら、まずこれらの者に、自分の家の者に敬愛を示し、親の恩に報いる習慣をつけさせなさい。それが神に喜ばれることです。』本当のやもめというのは、端的にいいますと本当に窮しているやもめのことです。つまり、**4 節**にあるように、もし、やもめに身内がいるならば、子供が、家族がいるならば、親戚がいるならば、その家族がやもめの面倒を見るべきである。経済的に援助すべきである。教会が全て負うべきではないということです。ちょっと経済的に困っているからといって教会に依存して、おんぶに抱っこではいけないということです。むしろ教会はそうした社会的弱者に家族がいるならば、その家族に面倒を見させて、むしろ自立支援を助けるという立場でサポートするということです。全面的に支援するのは、身内のいない、身寄りのない孤独なやもめ。病気とか、高齢が理由で働くこともできない、自活できない、自給できない、そういう困窮しているやもめを教会はしっかりとサポートすべきであるというのが、ここでパウロが勧めているところです。

で、もう一度**4 節**にある言葉に注目して頂きたいのですが、『しかし、もし、やもめに子どもか孫がいるなら、まずこれらの者に、自分の家の者に敬愛を示し、(今日欠けていることです。子供や孫はおじいちゃんやおばあちゃんに対して敬愛を示さない。お年玉やお小遣いを貰うならば喜んで来るけれども、ディズニーランドに連れてってあげると喜んでおじいちゃん・おばあちゃんのところに来るけれども、でも自分に何のメリットもなければ寄り付きもしない、声もかけない。神の家族の中ではそうであってはいけないということです。で) 親の恩に報いる習慣をつけさせなさい。』この『習慣をつけさせなさい』という動詞は、**2 章の 11 節**にも使われている言葉です。そこでは『女は、静かにして、よく従う心をもって教えを受けなさい。』『教えを受ける』という言葉が**第 1 テモテの 5 章の 4 節**の『習慣をつけさせなさい』という言葉です。ですからこれはしっかりと御言葉によって教え込んで、それを習慣とさせなさい。やもめに対して、年老いて 1 人身となってしまったおばあちゃん、若しくはおじいちゃんに対して、お年寄りたちに対して子供や孫は、若い者たちはしっかりと敬愛を示すように。これは聖書に書かれていることである。聖書において命じられていることである。ちゃんとリスペクトしなさい。そして親の恩に報いるように、教えこむように。勿論中には尊敬できないという親もあるでしょう。自分のことをちゃんと育ててくれなかった。平気で子供達を見捨てた。そういう親もあると思いますが、ただ産んでくれたという事は、これは事実であります。うまくは育てられなかったかもしれませんが。彼らにも弱さがあったわけです。彼らは間違いを犯したわけです。だからといって恨み続けて、「こんな親はリスペクトもできないし、尊敬もできないし、死んだらいい」と。これはクリスチャン的な態度ではありません。むしろ私たちは十戒にあるように『あなたの父と母を敬え。』その父母がどんな父母であってもです。無条件で敬えと言われてます。で、これは神に喜ばれることである。パウロは**エペソの 6 章**ではそのように言っています。これは神に喜ばれることである。で、**第 1 テモテの 5 章の 4 節**でも、「神に喜ばれることである。」と、繰り返しています。エペソ教会の牧師テモテに釘を刺すようにして言っています。エペソ教会にもパウロは手紙を宛てていますが、そこでも「両親を敬って、これは神に喜ばれることだから。」と既に書いていたわけですが、晩年になってもう一度そのエペソ教会の若い牧師テモテに対して、「両親を敬って、これは神に喜ばれることだから。」率先して積極的に教え込んで習慣とさせなさいと。これは私たちの教会にも求められていることです。小さな小学生だとか、そういう子供たちに教え込めというだけではなくて、誰でも親を持つてるならば、年老いたお父さんお母さんがいるならば、おじいちゃんおばあちゃんがいるならば、何歳だろうと教えられる必要があります。そのような習慣を私たちも身につけていく必要があります。そうでないと、神に喜ばれないという事を覚えたいと思います。親に喜ばれるよりも、神に喜ばれるために行うのであります。

で、5節『ほんとうのやもめで、身寄りのない人は、望みを神に置いて、昼も夜も絶えず神に願いと祈りをささげていますが、』ここで止めます。本当のやもめについて、教会が世話をすべきやもめについて、経済的にサポートすべきやもめについて書いてあります。『身寄りのない』というのは、直訳すると『完全にひとりぼっちにされた人』です。ですから、もしかしたら身寄りがあるかもしれません。でも、その身寄りはノンクリスチャンで、完全にそのノンクリスチャンの家族に見捨てられたというケースもあるでしょう。クリスチャンになって迫害されることもあるわけです。クリスチャンになって離婚させられることもあるわけです。クリスチャンになって戸籍から抜かれるようなこと、つまりはじきにされて家庭からも社会からも追放されるということもあったでしょう。そのような完全にひとりぼっちにされた人がまず条件として上げられています。で、その次に『望みを神に置いている人』これは勿論神に希望を置いている人、つまり神を信じているクリスチャンであるということです。で、もひとつの条件が『昼も夜も（直訳すると“夜も昼も”です。）神に願いと祈りをささげている人』つまり、本当のやもめは祈り深い人であるということです。昼と夜の順序が原文では夜から始まっているんですが、ユダヤ人の1日の始まりは夕方からです。日没から日没までというタイムスパンで彼らは動いているわけですが、でもそれ以上に夜昼まさにやもめはひとりぼっちになって昼の時間よりもその夜の時間の方が長く感じるわけでありまして。「今まで夫は自分のベットの横に寝ていた。でももうその夫はいない。いつも夫と一緒にだったのに。」日常はもうそこにはいないわけです。寂しい思いをするわけです。やたらめったら夜が長く感じるわけです。で、そういう時に当然眠れなくなったりするわけです。「寂しいな。心細いな。頼りないな」と。その時こそ本当のやもめは神に祈るのであります。夜なかなか眠れないからこそ、やもめたちは夜に、深夜に、明け方に祈るのであります。今日はどうでしょうか。「寂しいな、頼りないな。深夜になってテレビをつけます。深夜番組を見ます。またはインターネットでネットサーフィンをして時間をつぶそうとします。本当のやもめはそんな事はしません。本当のやもめはそういう夜の時間帯だからこそ眠れないならば祈るわけです。そのような祈り深い、信仰深い敬虔なクリスチャンのやもめは、尊敬に値します。で、尊敬に値するということは、当然支援するに値するということです。

で、6節『自堕落な生活をしているやもめは、生きてはいても、もう死んだ者なのです。』『自堕落』という言葉は直訳すると『快樂』です。快樂のために生きてるやもめは、生きてはいても、もう死んだ者なのです。で、これは勿論やもめに限らず、すべてのクリスチャンにも言えることだと思います。快樂のために生活している人は、生きてはいても、もう死んだ者である。快樂のために生活している主婦は、生きてはいても、もう死んだ者です。快樂のために生活をしているパートのおばちゃんも、生きてはいても、もう死んだ者なのです。快樂のために生活をしているサラリーマンも、生きてはいても、もう死んだ者なのです。快樂のために生活をしている年金受給者も、生きてはいても、もう死んだ者です。まあ、そのようにして私たちにもこれを当てはめたいと思います。また、この快樂は、自分を楽しませるという言葉でもありますから、快樂と言うといろんな快樂を皆さん思い付くと思うんですけども。性的な快樂もありますが、趣味や娯楽といった快樂もあるわけです。趣味に興じている。旅行ばかりしてるとか、または高価なブランド品を買い集めているとか、また趣味に没頭しすぎているとか、またギャンブルだとか株とか、そうしたものに没頭している。自分を楽しませるために、快樂のため生活しているそういうクリスチャンは、生きてはいても、もう死んだ者なのです。本来は歳を重ねてやもめとなっているクリスチャンの女性は、敬虔な女性でなければいけないわけです。信仰歴を重ねて、もう既にそういう女性たちは、信者の模範となって敬虔な生活を送ってなければいけないのに、年をとっているのに自堕落な生活をしている。これはもう目も当てられない話です。ヤコブの5章の5節も参照したいと思います。『あなたがたは、地上でぜいたくに暮らし、快樂にふけり、殺される日にあって自分の心を太らせました。』『自堕落』という言葉がここでは『快樂』というふうに使われています。まあそのような自堕落で快樂のために自分を

楽しませるために生活している人たちを教会がサポートするとますます自堕落になってしまうということです。下手に経済援助なんかすると、ますます彼らは快樂にふけてしまうわけです。ですから不用意にやもめだからといって教会が支援してはいけません。社会的弱者といっても、しっかりと吟味をしなければいけないということです。弱者でも自堕落な人たちはいるんです。生活に困窮していると言いながらも、自堕落な人たち、快樂にふけている人たち、自分を楽しませようとしてる人たちはいるわけです。ですからしっかりと見極める必要があります。

で、**第一テモテの5章7節**に戻って下さい。『彼女たちがそしりを受けることのないように、これらのことを命じなさい。』『そしりを受ける』というのは、非難をされないように、『非難』という言葉も度々この**第一テモテへの手紙3章**のところにも、監督や執事たちは、非難されるところがないものとしてあげられていますけれども、年取ったやもめも非難されるところがないように、つまり模範的なクリスチャンであるようにということが推奨されているわけでありませぬ。

で、**8節**に『もしも親族、ことに自分の家族を顧みない人がいるなら、その人は信仰を捨てているのであって、不信者よりも悪いのです。』文脈ではやもめのことを言っています。自分の家族の中に、身内の中にやもめがいるならば、年若い独り身となったおばあちゃん・おじいちゃんがいるならば、彼らを顧みなければならぬ。『顧みる』という言葉は直訳すると『生活の世話をしなければいけない』と言っているわけです。教会がサポートするのではなくて、家族は身内がサポートするべきであると。ちょっと先になりますけども**16節**に『もし信者である婦人の身内にやもめがいたら、その人がそのやもめを助け、教会には負担をかけないようにしなさい。そうすれば、教会はほんとうのやもめを助けることができます。』と言われている。教会に負担をかけてはいけません。教会にもリソースは限られています。教会もいろいろなニーズを抱えているわけです。ですから、まずは身内が、家族が、年若い者たちに敬愛を示し、特にやもめという社会的弱者に対してしっかりと支援をするように。「自分の生活で手一杯です。」と言っはいけないわけです。クリスチャンは自分のために生活をしているだけではありません。クリスチャンはまず自分の家族に対して、しっかりと目をかけて支援をしなくてはなりません。自分の生活さえ安定すればと、そのような生き方が望まれているのではなくて、たとえ貧しくても自分のためばかりでなくて、自分と同じ若しくは、自分よりも弱者に対してしっかりと支援できるような生活を営むべきである。まあ、それも働くことの理由であります。ただ腹を満たすため、ただ生活を安定させるため、余裕を持つために私たちは働くのではあります。それ以上にもっと私たちには高尚な目的が与えられています。弱い者を助けるためにも、支援するためにも、私たちは働くわけです。自分がぜいたくな暮らしをするとか、老後を楽しむためとか、趣味にお金をつぎ込むためとか、そういう自分たちの生活を良くするため、向上させるために働いていたならば、悔い改めなくてはなりません。若しくは、自分さえ食っていければそれでいいなんて考えならば、これも悔い改めなくてはなりません。むしろ私たちは積極的に弱い者を助けるため、自分の身内にそういう人がいるならば、まずはその人たちに。そういう人たちが特別なくても、教会にはたくさん必要を抱えている人たちがいます。本当のやもめ、本当の社会的弱者がいるわけですから、その彼らに支援をできるように、汗水たらして働くべきです。働けるならば、働くべきであります。選り好みをしてはいけません。自分がやりたい仕事、やりたくない仕事。そういうことで私たちは仕事選ぶのではなくて、むしろ神様が与えてくださるものは何でも頂いて、そしてそれは自分のためではなくて、他者のため・弱者のために用いて頂けるように。それが神に喜ばれることである。自分を喜ばせるんじゃないで、神に喜ばれるために懸命に働くわけです。勤労するわけでありませぬ。ですから、本来は教会にはニートなんて者は存在しないはずで、しっかりとそのこと教え込まれなくてはならないわけです。まあ、別に彼らのことを私は怠け者のように見なして、また彼らの存在を否定するつもりはあります。でも彼らはちゃんと教えてもらえるならば、彼らもまた神に喜ばれる生活を送ることができます。まあ、私たちは、教会

において神様に役割を与えられているということ、そして社会においても役割を与えられているということを知覚して、それぞれは神様に何らかの仕事を頂いているわけです。召しを頂いているわけです。で、それは動機としてすべては神に喜ばれるため。何のために生活するのか。何のために働くのか。それをしっかりと教え込まれていくなれば、誰一人として教会の中に自堕落な生活をする者、怠けて怠慢で、教会や政府などに“おんぶにだっこ”というような人たちはいなくなるわけでありませぬ。

で、もう一つ踏み込んで、この**8節**から展開したいわけですが、『**もしも親族、ことに自分の家族を顧みない人がいるなら、その人は信仰を捨てているのであって、不信者よりも悪いのです。**』ノンクリスチャンよりも悪いというのは、ショッキングな言葉です。教会には老若男女が集まってくる。で、残念ながら多くの人たちは、教会がそうした人たちをすべて面倒を見るべきだと思って、自分たちの幼い子供や10代の悪ガキたちを連れてきて教会に面倒を見させようとして。で、実際に子供たちなり家族の問題を抱えている人たちの状態が改善しないようであるならば、教会を非難するわけでありませぬ。教会が面倒を見ると思ったら大間違いです。教会は本当の弱者を見るのであって、それは身寄りのない人たち、誰も頼れない人たちを見るのであって、あなたがいるならあなたが責任を負うべきだということです。教会に押し付けてはいけないということです。牧師や教会のスタッフに押し付けてはいけないということです。反抗している我が子を教会に連れて行って、更生してもらおう。更生させてもらいたいと父親が、母親が連れてくるわけ。でも、それが叶わないと教会のせいにしてたりするわけ。でも、それは父親であるあなたの責任であるということ、母親であるあなたの責任であるということをおぼえてははいけません。**第一テモテの3章の5節**ならびに**12節**のところでも、そこでは自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができましょう。また、子どもと家庭をよく治める人でなければなりません。それぞれ監督と執事の資格にこのことが求められているわけ。クリスチャンは自分の家庭をしっかりと治める人でなければいけません。ですから、まずは自分が責任を負っているという自覚を持って、そして勿論教会はその責任を果たすためにサポートはしてくれます。でも、教会に押し付けるとか、丸投げするとか、牧師に全部任せてしまう。で、それがうまくいかないと牧師のせいにする、教会のせいにする、教会学校の教師のせいにする。そういう責任転嫁、若しくは責任放棄をしてはいけないということです。クリスチャンはまずは自分の家庭を治めるべきです。まずは夫婦関係、親子関係。そうしたところをそれぞれ自分が神から負わされているその責任というものを自覚して、それをしっかりと忠実に果たしていくということが必要であります。で、それを果たす上で教会は、若しくは牧師や神の働き人はサポートもしてくれるということです。そのためには祈りますし、そのためにはアドバイスしますし、そのためにはいろんなサポートができると思います。でも、間違っても教会に全部押し付けるとか、牧師に全部任せるとことは、これはただの責任放棄、若しくは責任転嫁につながっていくことだと言うこと。うまくいかなかった責任は教会にあるとか、牧師にあるというようなことをよく聞きますけれども、神は確かに教会という制度も創設されましたけれども、家族という制度も神が創設されたわけ。ですから私たちは自分の家族というその単位も尊重しなくてははいけません。神が教会も、そして家庭も制度として設けられたわけ。神の設けられた家庭をおろそかにしてはいけません。しっかりと家庭を大事にして、しっかりと治めていかなければいけません。でも、その上でもう一つ付け加えたい事は、だからといって家庭に常に振り回されてはいけないということです。**マタイの10章の35～37節**。そこも今参照したいと思います。『³⁵なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。³⁶さらに、家族の者がその人の敵となります。³⁷わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。』今晚のバイブルスタディーのちょうどテキストにあたるころなんですが、そこでも今晚詳しく見ますけれども、ここで皆さんに覚えて頂きたいのはバランスということです。私たちは自分

の家族にも目をかけて、家族にフォーカスを置く必要があります。でも、家族にフォーカスを置きすぎて、神にフォーカスを置くことを忘れてはいけないということです。まずは神との関係が最優先されるべきであると。で、その次が家族の関係です。で、その後はミニストリーです。ですから家族をそっこのけでミニストリー、奉仕、宣教、教会のいろんな活動、そうしたものに躍起になっているならば、それは本末転倒である。それは不信者よりも悪いということになります。でも、かといって家族の事ばかりで、神を礼拝することとか、神としっかり交わりを持つこと、それを犠牲にしているならば、それはもっと悪いことであります。キリストの弟子としては全くふさわしくないということです。ですから時には家族よりも神を優先して教会に礼拝に来ることもあるでしょう。時には自分の信仰の故に家族の要求を飲むことが出来ないということもあるでしょう。家族のニーズに敢えて応えない、応えることが出来ないことも生じてくるわけです。神を優先する中でそうしたことも選びとして私たちはチャレンジされていくわけですが、バランスを持ってまずは神を第一とし、そしてその次に来るのが家庭・家族です。その中で私たちは神の家族としてどのように優先順位をつけて、そして賢く正しい道を選び取っていくのか。常に神様に祈りながら、依頼みながら、アンバランスにならないように、極端にならないように、偏ることがないように気をつけていく必要があります。

で、テキストに戻っていただいて、**第一テモテ 5章 9節・10節**。『⁹やもめとして名簿に載せるのは、六十歳未満の人でなく、ひとりの夫の妻であった人で、¹⁰ 良い行いによって認められている人、すなわち、子どもを育て、旅人をもてなし、聖徒の足を洗い、困っている人を助け、すべての良いわざに務め励んだ人としなさい。』まず、**9節**の『やもめとして名簿に載せる』とありますが、『名簿に載せる』という事は、当時の教会には名簿があったということ。単純な話です。つまり、メンバーとして登録名簿が存在していたということです。「私はどの教会にも属しません。」なんていうことは、非聖書的な考え・発言であるということです。勿論私たちすべてのクリスチャンは、究極的には目に見えない天にある教会に、1つの教会に属する者ですけれども、地上にいる間はそれぞれ地域教会に召されているわけです。で、それぞれそこに名簿があって、そこに自分の名前が登録されて、そこで登録されている者はその地域教会の中で神に召された働きをしていくわけです。それぞれの召しと賜物に従って奉仕をしていく。キリストの体の器官の一部として、ちゃんと機能を果たしていく必要があります。「私はイエス・キリストを信じているけれども、どの教会にもつながらない、会員とならない、メンバーとならない。1人でも礼拝をできるし、時折いろんな教会に出入りをして、いろんな教会を見て、いろんな集会にも参加して、家でもインターネットで、本を読んで、いろんな形で私は宗教生活を送ることができます」と。そういうことを言っている人たちは、しっかりと聖書に立ち返って、私たちはどこかにつながるべきであるということです。そして、名簿に名前が載るように教会生活を送る必要があります。勿論、この名簿というのは形だけの教会員ではないことは明らかです。それはこの後を見れば分かります。『六十歳未満の人』というのも非常に興味深いわけです。当時の年齢というのは、今の感覚とは違うと思います。今60歳なんて言えば、まだまだ若いと思われるかもしれませんが、パウロの時代であれば60歳といえば完全に晩年です。平均寿命も今よりも短かったわけです。ですから、年寄りというのは少なくともパウロ時代では60歳以上ということです。60歳以上の方もこの中にはあると思いますが、そんな年寄り扱いされたくないと思う人もいますけれども、パウロの時代においては60歳以上が年寄り、60歳未満はまだ若いと言うことです。ですから60歳未満のやもめは名簿に載せないで、この名簿というのは特にサポートを受けるべき、教会が支援すべき人の名簿ということです。で、前にも見たように、本当のやもめ、名簿に載せるべき、サポートをするべきやもめは、身寄りのない人、完全にひとりぼっちの人と、**5節**に言われてました。また望みを神に置いている人。クリスチャンであることが最低要件です。で、日夜、夜昼祈る人、祈り深い人。それがまず条件として挙げられてました。で、**9節・10節**のところには『ひとりの夫の妻』である。まあ、離婚して1人になっている

のか、死別して1人になっているのかは、ここには明記されていません。でも『ひとりの夫の妻』というのは、非常に興味深いことです。2度結婚したわけではない。2度以上少なくとも結婚はしてはいない。一度結婚して離婚したか、死別したかで、今は独り身となっている。というケースです。勿論聖書において離婚の自由というのは、もう限られています。それは、信者ではない伴侶の方がもう離婚するか、離れていくか、若しくは信者同士であっても不貞の罪、姦淫の罪、不品行という性的罪があった場合、これは許容されるということがイエスによって言われてますので、それ以外の理由で離婚した場合は論外だと思います。サポートを受けるべきではない。今日の母子家庭の大半はまさに聖書の基準から照らし合わせると、本来は生活保護を受けるような、いろんな福祉支援を受けるような、税金を継ぎ込まれるようなものではないということです。で、実際に二度以上結婚した人が対象になっていないのはどういう事かといいますと、実際に結婚すれば必ず身寄りが増えるわけです。親戚も増えるわけです。で、そういう親戚たちが必ずやもめとなった人を支えていかなければいけません。一度結婚して、そこでも何人かの身内ができるわけです。で、2度結婚すればさらに倍増えるかどうかは別としても、それ以上に増える事は間違いないわけです。そうすると、より多く人たちからサポートを受けることが可能なわけです。そういう意味でも『ひとりの夫の妻』であると言うことが、要件として言われてます。

で、次にあげられてるのが『良い行い』。これは**マタイ 26章 10節**にも同じ言葉が使われています。女性に対して使われています。これは、イエス・キリストがベタニヤのマリヤに対して語られた言葉です。『するとイエスはこれを知って彼らに言われた。「なぜ、この女を困らせるのです。わたしに対してりっぱなことをしてくれたのです。』」イエスに対して立派なことをした。この『りっぱなこと』というのが『良い行い』と同じ言葉です。ベタニヤのマリヤがイエスに対して何をしたのか、皆さん知っていると思います。それが『良い行い』ということでありませう。究極の良い行いと言えらると思います。

で、次にテキストに戻っていただいて**第一テモテの 5章 10節**のところには『子どもを育て』。まあ、良い行いには、いろんな行いが含まれるわけですけども、具体的にはまずトップに上げられているのは、子供を育てるということ。ここからの順序が大事だということを感じながら見て頂きたいと思ひます。まずは子供を育てる。次に、隣人をもてなすこと。3番目は、聖徒の足を洗うということ。4番目は、困っている人を助ける。で、『すべての良いわざに務め励んだ人としなさい。』『努め励む』というのは、文字通りは『献身している人』ということ。身を捧げている人ということ。一言で言うと彼女たちは実にアクティブな有能な敬虔なクリスチャンたちということ。子供を育てること。これがトップです。家庭のミニストリー、これは神様が重んじられているということが分かります。まず自分の子供たちをしっかりとキリストに結びつけるように。キリストともに生涯歩むことができるように。孫に対してもそうです。これが一番大事なミニストリーです。

で、その後に来るのが『旅人をもてなす』こと。旅人というのは特に外国人もそうなんです、巡回伝道者とか、当時はホテルだとか宿泊施設があったわけではありませう。ですから個人のお宅に旅人たちは、特にクリスチャンの共同体では、それは巡回伝道者たちが宿をとったわけでありませう。で、そういう人たちをもてなすという事。これは古代イスラエルにおいても命令されていたこと。新約聖書の中にも度々旅人をもてなすことが奨励されてます。教会としてなすべきこと。たとえ貧しいやもめでもです。「貧しいからとてなすことができません。」という言い訳は通じないわけ。本当に教会からサポートを受けるべきやもめたちは、貧しかろうとお金があってもなくても、それでも旅人をもてなすということをするわけ。

で、『聖徒の足を洗う』というのは、これは特にクリスチャンたちに対して仕えるということ。『足を洗う』というのは、まさに人に仕えることの典型。最も卑しい仕事の1つ。それを率先して行う。

ですから順序として、まずは子供を育てる。そして旅人を、特に巡回伝道者、巡回説教者、そういう働き人をもてなすということ。で、次に挙げられるのが教会内の聖徒たちのニーズに応えるようにと。率先して卑しい仕事でも、足を洗うような仕事でも行っていくということ。

で、4番目が『困っている人を助ける』。これは一般的に困ってる人ですから、まずはクリスチャンが優先されるということです。まずは信仰の家族に対して良くしていくことが優先順位として求められています。

で、『すべての良いわざに務め励んだ献身している人』。年老いて体が不自由でも出来る事はあるわけです。これら全部をこなすことが出来なくても、少なくとも神に望みを置くことができます。少なくとも夜昼祈る事は出来ます。ベットの上でも、病床でも祈る事は出来るわけです。言葉を発することが出来なくても、体力がなくても、祈りは魂において行うことが出来るわけです。そういう人は、教会でサポートするに値する人であるということです。私も教会の年老いたやもめの人たちによっていつも祈られておりました。昔からいる1人で教会に来ているおばあちゃんたち。彼女たちは私個人のために祈り会を持って、ずっと朝3時には起きて祈ってくれていたということを前に聞いて本当に心動かされました。教会から離れ、そして教会を愚弄し、教会に集まってる人を皆偽善者呼ばわりして、神に対して背を向けて教会から離れた者のために、ずっとこの年老いたやもめのおばあちゃんたちは、祈り続けてくれたわけです。まあ、その結果神は彼女たちの祈りに応えて、私は再び神のもとに帰り、そして再び教会にも戻って来る事が出来ました。このようなやもめは私たちの教会にも必要であります。実際に身寄りがなくて、神に望みを置いて、昼夜祈って、そして1人の夫の妻でもあり、良い行いに励み、子供を育て、旅人をもてなし、聖徒の足を洗い、困っている人を助け、すべてを良いわざに務め励んでいる人は、いつでも教会にその姿を見つけることができます。彼女たちは間違いなく教会の中にいつも出入りしている人、見られる人です。教会の中に常に身を置いている人たちとも言えるでしょう。空いた時間を、自由な時間を神に仕えるために、また神の民に仕えるために充てている人たちです。時間を持って余して自堕落に、自分の快樂のため、楽しみのために生活している人ではないわけです。そういうやもめたちは必ず教会の中に見ることができます。で、彼女たちを教会は100%サポートすべきです。と言うのは彼らはもう十分に働いているわけです。支払いを受けて相応しい仕事をしているわけです。ただ働きをしているわけですが、でも彼女たちには経済的な基盤がないわけですから教会でサポートするのは、これは当然である。教会のスタッフと同様に働いているわけです。監督や執事や牧師と同じ仕事をしているわけです。当然教会でサポートすべきだということです。ただ年老いてしまって、もう家で何もしていない。ただ朝から晩までテレビを見ている。そんな人たちをサポートせよ、と言っているんじゃないんです。ただ楽をしたい、そういう人たちをサポートせよと言っているんじゃないんです。教会でしっかりアクティブに働いている人を、給与を払うようにしてサポートせよと、言っているんです。たとえ体が動かなくても、祈る事は出来るということを先程言いました。年老いていけば、若い時のようには働けなくなるのは必至です。病気にもなるでしょう。それでも働くんです。それでも出来る事は怠けずに、しっかりと忠実に行っていく、行い続けていくと。そういう人は教会でサポートするに値する人です。

第二テサロニケの3章6~13も参照して頂きたいと思います。『⁶兄弟たちよ。主イエス・キリストの御名によって命じます。締めりのない歩み方をして私たちから受けた言い伝えに従わないでいる、すべての兄弟たちから離れていなさい。⁷どのように私たちを見ならうべきかは、あなたがた自身知っているのです。あなたがたのところ、私たちは締めりのないことはしなかったし、⁸人のパンをただで食べることもしませんでした。かえって、あなたがたのだれにも負担をかけまいとして、昼も夜も労苦しながら働き続けました。⁹それは、私たちに権利がなかったからではなく、ただ私たちを見ならうようにと、身をもってあなたがたに模範を示すためでした。¹⁰私たちは、あなたがたのところ、いたときにも、働きたくない者は食べるなど命じました。¹¹ところが、あなたがたの中には、何も仕事をせず、おせっかいばかりして、

締まりのない歩み方をしている人たちがいると聞いています。¹² こういう人たちには、主イエス・キリストによって、命じ、また勧めます。静かに仕事をし、自分で得たパンを食べなさい。¹³ しかしあなたがたは、たゆむことなく善を行いなさい。兄弟たちよ。』ここで止めておきます。

やもめたちは、締まりのない歩み方をせずにしっかりと教会の中で仕事をする人たちでありました。現代のように女性たちが社会進出して、いろんな職場で働けたわけではありません。職安に行って女性にできる仕事がいつもあって、女性たちにそれらがまわされるという事はなかったわけです。女性たちが働く事は、当時の社会では、これは出来なかったことです。物乞いするとか、そういうことがなければ、とても1人では生活出来なかったわけです。ですから現代と2000年前では勿論勝手が違うわけですが、しかし共通していることは、どの時代においてもクリスチャンたちは勤労でなくてはいけないということです。できることをとにかくしていくわけです。社会で働くことができなければ、教会で働くことができます。物理的な活動ができなければ、霊的活動はできるということです。いずれにしてもアクティブに働いていることは間違いありません。そのような人達を教会はサポートすべきです。それが出来ない人には、ちゃんと教えこむ必要があるということです。

で、テキストに戻って頂きまして今度は**11節**と**12節**をお読みします。『¹¹若いやもめは断りなさい。というのは、彼女たちは、キリストにそむいて情欲に引かれると、結婚したがりと、¹²初めの誓いを捨てたという非難を受けることになるからです。』若いやもめというのは、少なくとも60歳以下であるということです。パウロはもうこの当時60歳以上、テモテは30代であったと思われると、これは前回お話ししました。で、この若いやもめは、おそらくはまあ30代とか、20代の可能性もあるわけですが、どんなに年入っていても50代であったと思われる。そうするとキリストにそむいて、情欲に惹かれて結婚したがるようになる。この『キリストにそむいて』というところは、別の訳では『彼女たちの肉欲が、キリストの献身を打ち負かす時』キリストの献身というのが**12節**の『初めの誓い』ということです。『誓い』という言葉は*印が付いていて欄外には直訳として『信仰』とあります。初めの信仰を捨てた。キリストに対する献身を自分たちの肉欲によって捨ててしまう。逃げてしまう。やめてしまう。特に、『情欲に引かれ』ていくというのは、ギリシャ語のニュアンスですと『くびきから逃げようとする若い雄牛のイメージ』二頭の雄牛がくびきを横棒で繋がれて、そして畑を耕すとか、荷物を運ぶために使役されるんですけども、そのくびきから逃げようとする若い雄牛をイメージして頂きたいと思います。もうそのくびきは嫌だと、もうそんなくびきは負いたくない、と言って逃げようとする人たち。若いやもめに多く見られるということです。これは一般論で言っているわけです。年老いていくと、もう肉体的にも性的にも、とてもそんな結婚なんてというふうを考えるかもしれませんが、若いやもめはまだ結婚したがるわけです。結婚が悪いとは言っていないけども、既にやもめになって『初めの誓い』をしてしまっているにもかかわらずということです。もうこれからは、私はイエス・キリストにすべてをおささげしていきますと。やもめとなった以上残りの生涯は全て、カトリックのシスターのように、修道女のようにささげていきます。と、約束しながら、誓約しながら、そういう信仰を表明しながら、ちょっと優しそうな男性だとか、自分のことをよく見てくれるような人がいると結婚したがるわけです。まあ、つつい若い時に夫を亡くしたり、又は離婚したりすると、結婚しなければという思いも生じてきてしまうものです。これは自然の思いだと思います。若しくは周りからも「結婚した方がいいよ。」というようなことも言われたりして、中にはそれがプレッシャーとなったり、強迫観念のように感じられて、「何が何でも結婚しなきゃいけない」。結婚がすべてであるかのように思い込んでしまって、もうやもめとなった以上は、また婚活して、そして再婚しなきゃいけない。でも、その背後にあるのは、その奥深くにあるその動機の部分には何があるかと言いますと、それは寂しさから逃れるため。まさにくびきから逃げようとする雄牛のように。もう寂しくなりたくない。又は孤独を癒すとか。又は夫がいなければ生活できないから生活の安定のため。イエス・キリス

トと結ばれて、イエス・キリストによって寂しさを満たしてもらおう、慰めてもらおう。イエス・キリストによって生活を支えてもらうという信仰を持たずに、目に見える夫に頼ろうとするわけです。再婚相手に寂しさを満たしてもらおうと、孤独を癒やしてもらおう、生活を支えてもらおう。要するに不信仰に陥るわけです。そのことから結婚しようとするとは必ず後で後悔することになります。打算で結婚するのも、打算で再婚するのも必ず後悔します。「こんなはずじゃなかった。最初はこうじゃなかったのに。」特にこの若いやもめが再婚した場合、彼女は初めの誓いをしていたわけです。「もうこれからは主にささげていきます。」献身を表明していたわけです。「もう私は主にすがっていただけです。主のためにすべてをささげます。」その頃は時間の余裕もあって、そして一生懸命ここに挙げられているような尊い働きを担っていたわけです。非常に霊的で、敬虔で、充実したクリスチャンライフを送っていたわけです。たくさんの奉仕が出来たわけです。結婚していたときには、なかなか出来なかったことも、やもめになったので色々と時間に余裕ができて、経済は苦しいけれども、今までできなかったことができるようになったわけです。ところが、また再婚してしまいますと、その独身の時にいろいろできたことが、今度できなくなって家族に縛られてしまう。夫に縛られてしまう。そうすると「独身の時のほうが、やもめの時のほうが良かった」と言うようなことになるわけです。後悔するわけです。打算で再婚してしまったことに自責の念を覚えるわけです。「やっぱり結婚しないほうが良かった。」実際に私は牧師としてこういう話をよく聞きます。私はやもめになった人が再婚してはいけないとは思いません。ただ多くのやもめが再婚して後悔しているのをよく知っています。「こんなことだったら再婚しなきゃよかった。後悔しています。」

『主に仕える』これは本当に幸いなことです。結婚していても主に仕える事は出来ますが、でもやもめで仕える。若しくは独身者として仕えるならば、それはもっと幸いであるという事をパウロはコリント人への手紙の中でも言っております。第一コリントの 7 章 25 ~27 節にこう書いてあります。『²⁵ 処女のことについて、私は主の命令を受けてはいませんが、主のあわれみによって信頼できる者として、意見を述べます。²⁶ 現在の危急のときには、男はそのままの状態にとどまるのがよいと思います。²⁷ あなたが妻に結ばれているなら、解かれないと考えるのはいけません。妻に結ばれていないのなら、妻を得たいと思っははいけません。』続きもございませぬけれども、このパウロが独身のことを神からの賜物、これは特権であるということをおこの箇所^{とつとつ}で述べるんですけれども、32 節のところ『³² あなたがたが思い煩わないことを私は望んでいます。独身の男は、どうしたら主に喜ばれるかと、主のことに心を配ります。³³ しかし、結婚した男は、どうしたら妻に喜ばれるかと世のことに心を配り、³⁴ 心が分かれるのです。独身の女や処女は、身もたましいも聖くなるため、主のことに心を配りますが、結婚した女は、どうしたら夫に喜ばれるかと、世のことに心を配ります。』まあ、その前後も、もし読んで頂ければ、パウロが言わんとすることが分かると思います。ただ、この文脈ではやもめのことを言っているのではありません。やもめが再婚すべきか、すべきでないかということをおこの文脈で言っているのではありません。そもそも生涯結婚せずに未婚のまま、独身者として、カトリックの修道士のように、ブラザーやシスターのようにという、神様から特別の召しを受けた者たちに対する言葉であります。パウロもこのときには独身者でありました。かつて結婚してたんですが、何らかの理由で、妻が先立ったか、もっと可能性が高いのはパウロがクリスチャンになったので妻が離婚したのか、パウロを離縁したのか。まあ、その可能性が高いと思いますが、いずれにしても、もし独身という立場になったならば、それはやもめというのも 1 つの独身者の形であります。もう一度考えて、再婚すべきかどうか。「結婚した方がいい」と周りは言うかもしれませんが。自分もそう思うかもしれませんが。でも本当は、何のために結婚するのか。寂しさを紛らすためなのか。孤独を癒すためなのか。生活を安定させるためなのか。それは打算なのかどうか。独身者にもこのことを私は言いたいと思います。結婚がすべてではありません。結婚は確かに神からの祝福であります。『生めよ、増えよ。地を満たせ。』とも言われています。大半の人は結婚に召されていると思いますが、中には特別に結婚せずに独

身で神様によって用いられていく人もあります。で、もし神様があなたをやもめとしたならば、男も女も両方に言えることです。また再婚すべきかどうか、これも再考すべきだということです。で、再婚するのにもまた神様の導きがあるならば、そこには祝福があると思います。でも、再婚しないのも1つの選択肢であるということ。で、独身のままで生涯自分の究極の花婿であるキリストに仕えていくこと。これは本当に素晴らしい祝福に満ちたクリスチャンライフとなるということも強調しておきたいと思います。もし、教会に、ここに名簿に載せられているようなやもめがいるならば、その教会は本当に祝福されると思います。60歳以上のやもめと敬虔なクリスチャンの女性たちが、スタッフとして登録され、アクティブに働いている教会、そういう教会が今日見られるならば、本当に幸いだと思います。男性の教会のスタッフも勿論必要です。監督、執事。彼らも教会にたてられていく必要があります。でも、ひょっとしたら彼らよりもこのような年老いた敬虔なやもめたち。彼女たちがちゃんと自分たちの立場をわきまえて、そして自分たちの召しを確信して、聖書に奨励されているように教会生活を送るならば、教会はもっと盛んとなり、もっと神の栄光を現すことができるようになるかと思えます。

で、またテキストに戻って頂きたいと思います。13節『そのうえ、怠けて、家々を遊び歩くことを覚え、ただ怠けるだけでなく、うわさ話やおせっかいをして、話してはいけないことまで話します。』これは若いやもめで『初めの誓い』信仰を捨てて、情欲に負けて、くびきから逃れて、思わず打算から結婚してしまったという不信仰な人たちのことです。彼女たちは怠けて家々を遊び歩くことを覚えてしまう。『覚える』という言葉は、実は4節でも使われていた『習慣をつける』という言葉と同じです。で、それはさかのぼれば2章に使われていた『教えを受ける』という言葉。原意は『学ぶ』という言葉です。『覚えてしまう。学んでしまう。』ということです。これも気をつけなくてはいけないことです。時間を持て余して彼女たちは仕事をしなくなります。初めの誓い、初めの信仰によれば、その余った時間は全てフルタイムで主にささげていたわけです。でも、情欲に負けて結婚してしまった場合、彼女たちは、まあ、夫がいるわけですからもう経済的には心配いりません。そうすると時間を持て余して、仕事もしないで、教会でも奉仕もしないで、怠け癖がついて、暇を持て余していますから、あちこち歩きまわるわけです。遊びまわるわけです。で、うわさ話・ゴシップに花を咲かせ、井戸端会議に熱心になって、おせっかいをして、話してはいけないことまで話す。これは女性においては大きな罪になるかと思えます。実際に執事の妻に対して、または女執事に対して、悪口を言わないということがその資格に問われていました。悪口を言わない。ゴシップをしない。うわさ話をしない。この若いやもめたちはそのような言うてはいけない事までも、うわさ話とか、おせっかいをして、暇ですからもうとにかくいろんな人の事に首を突っ込むわけです。ワイドショー的な話題があれば、そういったものに飛びついて「あの人はあんなことを言った。あんなことをやった。」と。そういったことをずっと吹聴してまわるわけです。それで教会の中をかき乱すということまでしてしまうわけです。

で、14節で『ですから、私が願うのは、若いやもめは結婚し、子どもを産み、家庭を治め、反対者にそしる機会を与えないことです。』まあ、結婚するならば本当は未婚の状態の方がベターかもしれませんが、でも第一コリントの7章9節にも独身者で自制ができないなら結婚すべきだと、パウロは言っています。ですから、若いやもめでも自制ができないなら、結婚すべきである。第一コリントの7章9節にその基準が書いてあります。で、結婚したならば、家庭を自分の職場とし、本拠地とし、ミニストリーの現場としてしっかりと家庭を治めるように。この『家庭を治める』という言葉は、『家の主人となるように。家長となるように。』という言葉でもあります。もちろん霊的リーダーは夫であり、父親でありますけども、でも再婚したやもめに対しては重い責任をパウロは求めているわけです。しっかりと家庭を治めるように。それは反対者にそしる機会を与えないというのが目的であります。『機会』という言葉は、軍隊用語で『作戦基地』という言葉であります。反対者に、敵に作戦基地を与えないように。指を差されて「これだから

クリスチャンはどうかの」とか。まあ、例えば若いやもめに間違っただけで教会が経済的な支援を与えるようなことをしてしまいますと、彼女たちは生活に余裕ができますからそこで、本来は教会で働かなければいけないところを、あちこちに飛びまわって、言うてはいけないことを言ったり、おせっかいは焼いたり、そしてうわさ話を吹聴したりして、結局ノンクリスチャンからも指を指されることがあるわけです。教会は、そのようなやもめたちを増やしているような、あちこちに害悪を振りまわすような、そういう自堕落な人たちが教会が支援して、サポートしているような、そういう印象なり非難を与えてしまうわけです。そういう事がないように注意なさい、というのがパウロの勧めであります。

で、**16 節**に『もし信者である婦人の身内にやもめがいたら』これは“婦人に”と限定されています。まあ、当時の社会を考えると婦人の身内というと、やもめのやもめというふうに捉えられてしまいます。女性には生活力がないと。社会は男女平等、均衡に全て働けて稼ぎができたわけではありませんから、ちょっと非現実的な話になってしまいますけども、ただ公認本文と言う写本においてはここは **16 節**は『もし、信者である男若しくは女の身内にやもめがいたら』と。女だけでなく“男にも”という言葉が含まれています。これは英語の King James version で確認もできます。女性だけでなく、男(やもめがいた場合)です。身内にやもめがいた場合、『その人がそのやもめを助け、教会には負担をかけないようにしなさい。そうすれば、教会はほんとうのやもめを助けることができます。』

で、**17 節**、**18 節**『よく指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えのためにほねおっている長老は特にそうです。』今度は目を教会のリーダーに向けるように。長老というのは単に年齢を重ねている人、おじいちゃんとかを言っているのではなくて、これは教会のリーダーのことです。成熟したクリスチャンのリーダーのことです。今日では牧師に相当するものです。教会指導者に対してしっかりとサポートするように。教会は神の家である。家族である。ですから家族の中で働いている者を、家族がサポートするのは当然のことだと、パウロは言っているわけです。で、『**二重の尊敬**』という言葉ですけども、これは新共同訳聖書では『**二倍の報酬**』と訳しています。態度においても尊敬すべきですけども、金銭面においてもちゃんとその働きに応じた対価を教会は支払うべきであると。なぜこれが尊敬・態度におけるものだけにとどまらずに、金銭にもかかわる、給与にもかかわることにつながるのか。それはその後を見ていただくと文脈で **18 節**『聖書に「穀物をこなしている牛に、くつこを掛けてはいけない」、また「働き手が報酬を受けることは当然である」と言われているからです。』明らかに文脈上ここでは長老を経済的にサポートするように。『**二重の尊敬**』は、ですから新共同訳では『**二倍の報酬**』と訳しています。まあ、かといって一般の労働者の 2 前の給料を与えなければいけないというふうに、ここでパウロは言っているわけではないと思います。そうではなくて **18 節**に書かれている通り、働いている者に対してそれ相応の給与なり、経済的支援を行うのはのは、当然のことだということを言いたいわけです。申命記 **25 章 4 節**がそのカギ括弧の最初の引用です。『脱穀をこなしている牛にくつこを掛けてはならない。』牛に餌をやらずに、ただ牛をこき使って、畑を耕したり、ここでは『穀物をこなしている』というのは、石臼を引かせて製粉作業しているその牛を、ちゃんと大事にしなさい。牛にもちゃんとご飯を与えなければ、製粉作業も脱穀作業もそうですが、ままたまならないわけです。ですから少なくとも長老は、牧師は、牛よりも尊敬しなさいということです。で、その後に『働き手が報酬を受けることは当然である』これは興味深いことですけども、イエス・キリストの言葉であります。マタイ **10 章 10 節**、もう一つルカ **10 章 7 節**にも並行記事ですけども、イエスがこの言葉を語っています。で、その 2 つを持ってパウロは『聖書に』と言っています。つまりパウロはここでは旧約と新訳のそれぞれから引用して、それぞれを聖書と、ひとまとめにしています。福音書も聖書として認められていたということが 1 つ示唆されています。で、パウロは**第一コリント 9 : 9**でもこの申命記の言葉を引用して語っています。『⁹モーセの律法には、「穀物をこなしている牛に、くつこを掛けてはいけない」と書いてあります。いったい神は、牛のことを気にか

けておられるのでしょうか。』で14節にも『¹⁴同じように、主も、福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活のささえを得るように定めておられます。』と。そこには『主も』とあります。主イエスもということです。旧約の申命記25:4にも律法に定められてるし、主イエスご自身もこの聖句を意識しながら、教会の働き人は教会からサポートを受けるべきだ。牧師は教会によってしっかりと生活を支えられるべきだということを述べています。古代イスラエルにおいていわゆる聖職者というのはレビ人でありましたが、レビ人はイスラエルの12部族からそれぞれ10分の1を受け取っていたわけです。12部族からそれぞれ10分の1をレビ人に与えたのは、レビ人は相続地を持たなかったからです。でも、それぞれ12部族から10分の1をもらうということは、他部族よりも多くもらっていたということです。10分の1が12部族から与えられたという事は、他部族よりもちょっと余分にもらっていたということが一目瞭然です。その分相続地は持っていなかったと。相続地を持っていないって事は自分の土地を持ってないので、自分で畑を耕して、自分で糧を得ることができなかったわけです。そのような仕事をしない代わりに彼らは24時間聖職者として神に、そして12部族の一人一人のために仕えていたわけであります。ですから、十分ではなくて十二分もらっていたわけです。それが、古代イスラエルの聖職者の姿でありました。で、新約時代にもそれはもちろん適用されるべきだということをパウロは言っているわけです。二倍の報酬とは言わないまでも、ちゃんとしかるべき対価を与えられるべきである。労働の対価です。二重に尊敬を受けるべきである。ただパウロ自身は天幕職人でもありました。ユダヤ教のラビでもありましたけれども、天幕職人として父親の職業をそのまま受け継いで、今日のテントのような物を作ったわけですが、それによって給与も得たわけです。で、教会にその分負担をかけないようにも。いわゆる自活伝道、時給伝道も展開していたわけです。でもそれは極めて例外的なものだということをパウロは同時に述べております。本来はパウロは教会に仕えてますから、教会で働いてるわけですから、教会からサポートを受けるべきだったのです。でも敢えて教会からサポートを受けないということをしました。その理由の1つは、実際に誤解を与えないためでもありました。偽教師たちが横行していて、偽教師たちは教会から金をぶんどっていたわけです。巻き上げていたわけです。その偽教師たちと同じに見られないために、敢えて不安定な教会からは、例えばコリントの教会からはパウロは一切給料をもらいませんでした。コリントの教会ではパウロの使徒職としての権威までも疑っていたわけです。「パウロは牧師じゃない。」パウロが始めた教会なのに。「パウロは使徒ではない」と。そのような非難をパウロは受けていたので、非難を受けているような教会から私は給与をもらうわけにはいかないと。むしろパウロはそのために自分の生活を支えながら身を粉にして働き、パウロは自分もサポートしましたけれども、教会も自分の働きによってサポートしたわけです。で、それは例外であるということです。

で、これは今年のニュースに、これは週刊ポストが初めて報じて、そしてそれがインターネット上にも広がったものですが、牧師の平均年収276万円という話です。週刊誌にそういうものが載るのは本当に前代未聞のことだったわけですが、一つ言えることは、世の中は牧師がいくらもらっているのか関心があるんだなと。昨今ではキリスト教の結婚式がよく行なわれて、ポピュラーになりました。日本全体の結婚式の6割7割はキリスト教式ですから、牧師が結婚式をしていくらもらっているのか。結婚式が牧師のまるで主たる仕事のように世の中の人々が思って、「日曜日だけ働いて楽だな。土日だけでいいのか。こんな楽な商売はない。私も牧師になりたい。いくらもらえるのか。」そういう関心が高まって、週刊誌でも報じられたわけです。で、ちなみに276万円という平均年収は、日本基督教団の話です。この2010年度の日本基督教団の牧師に支払われた謝儀です。日本基督教団では牧師給のことを謝儀といいます。平均ですから勿論上は一千万円以上の牧師もいるわけです。日本基督教団で一千万円以上の年収の人もあるわけです。でも、ほとんどもらっていない人もあるわけです。ですから、平均が276万円ということです。でも、この276万円だけが収入ではないとも言えます。というのは、牧師の場合は住居費を払ってもらっている場合も

あります。牧師の家の住居費、また光熱費、そして通信費、また車の維持費、福利厚生、そういったものもすべて教会がサポートするというケースが多いわけです。それに加えて現金収入も必要ですから、それが年収の276万円というケースがあるわけです。で、これは勿論バラつきがありますから、教会でとても牧師を養えない、牧師の家庭をサポートできない。そういう家庭もいっぱいあるわけです。ですから、私も以前は全く無給で働いていましたし、又私の知り合いの牧師もチリ紙交換をしながら、牧会をしていました。先週金曜日の夜に来た見城和人さんという牧師は、チリ紙交換をして、伝道もしながら牧会をしていました。まあ、そういう必ずしも余裕のない教会は、牧師がパウロのように天幕職人のようにして、テントメイキングをしながら、時給伝道又は自活伝道をしなくてはいけない、そういう生活を余儀なくされるケースもあります。でもそれは教会にとっては、由々しきことであり、残念なことであり、あつてはならないことで、例外的なことだということです。フルタイムで 牧師が教会で働けるならば、これほど教会にとって幸いなことはありません。牧師に給与なんか払いたくないから外でちゃんと仕事をして欲しいとか、暇な時に教会で牧会していればいいと。そういうことでは、教会は成り立ちませんし、教会は衰退する一方であります。ですから、教会で牧師がフルタイムで働ける。これが本来の姿で、理想であります。最初のうちは貧しくて、中々牧師をサポート出来ない、家庭を支援できないというケースもあるでしょうけれども。ただ聖書はハッキリと『よく指導の任に当たっている長老は』。“よく指導の任に当たっている長老”です。これも注意しなくてはなりません。いい加減な指導ではいけないということです。で、さらに『みことばと教えのためにほねおっている長老』みことばと教え・教理です。このために骨折っている長老・牧師は、特に二重の尊敬を受けるに値する者。若しくは二倍の報酬を受けるに値する者だと、パウロは明言しています。これは、敢えて明言しているのは、エペソの教会ではテモテに対して「あいつはまだ若いし、そんなサポートをするには値しない。」とか、「貧しいままで良いじゃないか。清貧が大事である」と。「牧師は貧しくて良いんだ」と。「衣食があれば十分である。」まあ、そういうことも確かにパウロは言っていますけれども、このあとテモテの手紙を読むと書いてありますが。でも、本来牧師は穀物をこなしている牛のように、一番教会の下々のところで、一番縁の下というようなところで、支える働きをしているわけですから、しっかりと評価されて、それに対しての対価を教会が、又経済・財政として、金銭としてサポートすべきであるということを書いて、ますますそのことで教会は成長し、発展していくんだということを述べているわけです。

もう一つ参考までに聞いて頂きたいことですが、『二重の尊敬』、若しくは『二倍の報酬』。大体牧師の給与の平均年収、日本基督教団では 276 万円だと言いましたけれども、現代の教会では大体ばらつきがあるんですけれども、どういうふうな基準があるのだろうか。中には公務員並みに払うべきだと言う教会もありますし、「牧者は貧しい方が良い。」と言って、ろくに給与を払わない教会もあります。で、その中で聖書の中にも基準があることも先程述べたところです。レビ人は、十分の一をそれぞれ 12 部族からもらって、十分どころか十二分ももらっていたというふうに言いました。で、ちょっと古い資料ですが、1928 年のマコーミック神学校というところがあるんですが、その教授が出した『牧会の実践』という本があります。1928 年のものですが、現代にも通じる普遍的な内容となっていますので、まあ、それは特に牧師の給与の基準、謝儀の基準について述べている内容です。ちょっと聞いて頂きたいと思います。項目が全部で 6 項目あります。

第一に『会員の生活基準の最高でもなく、最低でもない普通の生活が営まれること。』これが第一項目に挙げられています。で、カルバリーチャペルの牧師たちもこれに沿っています。最低と言えばキリがないわけです。収入ゼロという人もあるわけですから、ゼロであつて良いわけではありません。でも、最高であつてはいけないわけです。ある一部の“繁栄の神学”というものを説いている教会では、特に韓国の教会やアメリカの一部の教会で多いんですけれども、「信仰があれば、繁栄する。成功する。ビジネスも成功

して、巨万の富を築くことができる。」だから、そういう教えを説く牧師は教会の中では一番リッチでなければいけない。一番収入が高くなければいけない。ですから、牧師はブランド物に身を固め、そして高級車を乗り回し、豪邸に住んでいなければ証しにならない。牧師が一番給与をもらってなければいけない、ということで、そういう教会もあります。でも、それは全く非聖書的な話です。『**会員の生活水準の最高でもなく、最低でもない生活の風雨の生活が営まれること。**』

で、2番目は『**牧師の子どもの教育がふさわしい方法でなされること。**』まあ、給与が少ないので、中々牧師の家庭の子どもたちは十分な教育が受けられないケースがあります。

で、3番目に『**教会への献金、他の団体への献金、同窓会への後援金、その他の牧師の出費も考慮されるように。**』

で、4番目は『**牧師が書籍を買ったり、勉強会に出席したり、休暇を過ごしたりする費用を考慮に入れること。**』

5番目は『**牧師が公的な仕事をするために、例えば適当な服を買うなどで不足がないように。**』

6番目は『**保険、年金、引退後の準備も考慮に入れるように。**』

といった6項目です。これは中々バランスのとれた牧師の給与基準、謝儀基準になってるかと思います。まあ、牧師の私がこれ話すのはちょっとふさわしくないのかもしれませんが、ただ聖書において教会の指導者、ここでは“長老”と呼ばれていますけれども、特にみことばと教えるために骨折って、よく指導している教会指導者に対して、しっかりと教会員は二倍の報酬なり、二重の尊敬を与えなくてははいけないということ。これは日本の教会ではあまりなされていない現状を私はよく知っています。牧師がちゃんと評価されていない。教会員は自分たちの生活がいっぱいだからといって、牧師の家庭のことを顧みない。「勝手に牧師になったんだから、自分で何とかしなさいよ。」というような態度の信徒もいますし、「自分たちが食わしてやってるんだ。」というような、全く不遜な態度の教会員も多く見られる。非常に残念なことですけれども、本当に教会員がしっかりと聖書に基づいて自分たちの指導者のために祈り支えるならば、その教会は間違いなく祝福されるはずであります。神の望まれるような教会に発展するはずであります。

で、次にテキストに戻って頂いて、**19節『長老に対する訴えは、ふたりか三人の証人がなければ、受理してはいけません。』**これは、現実問題としてエペソの教会に起こった問題です。長老と呼ばれる指導者たちに何か問題があった、不手際があった、罪があった。それに対してテモテが対処に困っていた。苦慮していたということです。そんなテモテに対して、長老に対する、教会のリーダー若しくは牧師に対する訴えは、ふたりか三人の証人がなければ受理してはいけません。ふたり三人の証人というのは、これは**申命記 19章 15節**の律法（『**どんな咎でも、どんな罪でも、すべて人が犯した罪は、ひとりの証人によっては立証されない。ふたりの証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない。**』）に基づく基準です。ふたりか三人の目撃証人。そういう証人がいなければ、長老、教会指導者、牧師に対する訴えは、受け付けては行けない。相手にしてはいけないと。一人の人が「あの牧師がこんなことを言った。」とか、「あの教会指導者があんなことやった。」というようなことを言いに来て、まともにその訴えを受けてはいけない。ふたりか三人の証人をちゃんと用意して、その上でなければ聞かないという姿勢をとらなくてはいけないということです。**マタイの福音書 18章 16節**に、イエス・キリストがやはり同じようにこの基準を批准しています。教会の中でトラブルが起きた時、『**もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。**』ですから、ここでは特に長老、教会の指導者、牧師に対する訴えは、若しくは非難であったり、批判という場合、文句、悪口でもいいかもしれませんが、それはふたりか三人の証人がなければ、耳を貸してはいけない。もう相手にしてはいけない。「もうあなたの話は聞きませんよ。」という態

度でなければいけないと言っているわけです。牧師は人の前に立つ性質上、どうしても人からの非難を受けやすい、非難の的になりやすいというのは、これは否めないことです。これはどの指導者も同じです。政治指導者もそうです。人の前に立つ者は、必ず人の批判にさらされる。これは避けられないことです。誹謗中傷、これもよくある話です。牧師批判、牧師の文句、不平不満。悪く言われることは、もう常であります。何故そんなふうに悪く言われるのか。それは、サタンがそう願っているからです。教会の指導者が悪く言われて、そしてそのことによって教会が分裂するならば、それはサタンにとって喜ばしいことだからです。教会の指導者を潰せば、教会はいとも簡単に共倒れということになります。ですから、ことさらに牧師は狙われるわけです。そういう意味で、よく悪口を言われるわけです。**第1テモテ 3:11**には『**婦人執事も、威厳があり、悪口を言わず、自分を制し、すべてに忠実な人でなければなりません。**』“悪口を言う”という言葉が使われています。この“悪口”という言葉はギリシャ語の“ディアボロス”英語でも“ディアボロス”そのまま使います。“ディアボロス”とは、『**悪魔**』のことです。“悪口を言う”という罪は、悪魔的な罪だと聖書は言っているわけです。そのような悪魔的な罪『**悪口**』が、特に牧師に向けられるということです。**第1テモテ 3:11**では、特に女性によく見られる罪とされています。女性の信者がよく牧師の悪口を言う。これはもうよくある話だということです。で、そういったことに対して、あなたも気を付けて下さいということです。ふたりか三人の証人がなければ、もう聞く耳を持たないということです。この教会の牧師のことで、あの教会の牧師のことで、よその教会の牧師のことでもそうです。特に教会の指導者に対する批判なり、非難、悪口。これには耳を貸してはいけません。ふたりか三人の証人がいて、初めて耳を貸すべきだということです。**箴言 26:20**『**たきぎがなければ火が消えるように、陰口をたたく者がなければ争いはやむ。**』“陰口をたたく”というのは、『うわさ話をする。ゴシップをする』と同じことです。『**たきぎがなければ火が消えるように**』とありますけれども、ゴシップを、若しくはうわさ話・陰口・悪口を言う人も問題ですけれども、それ以上に問題なのは、その陰口を、その悪口を、そのゴシップを、そのうわさ話を聞く人たちが一番の問題であるということです。その聞く人たちが“たきぎ”なんです。誰も聞かなければ、火は小さく、ほとんどくすぶって、すぐに消えてしまうものだと思います。でも聞くから、たきぎがそこに二本、三本、四本、五本と増えていくから、火が大きくなっていくわけです。聞かなければ、その火はいくらでも小さいまま、若しくは火が点かないまま、くすぶって終わると。ただの煙で終わるということもあるわけです。ゴシップの問題は、ゴシップをする人よりも、ゴシップを聞く人だということをいつも心に留めておいて下さい。「私はゴシップなんか言いません。」でも聞いているなら、あなたは同罪であり、それ以上の罪も問われるということも肝に命じて欲しいと思います。もし、牧師の批判を耳にしたら、ふたりか三人の証人を伴わない限り、あなたはハッキリとこう言い返して下さい。「私はその話は聞きません」と。**MGF**ではこのことを特に言いたいと思います。私は自分の文句を言われたくないと言っているんじゃないやありません。文句があるなら直接言ってきて下さい。ただ、それが言いたいだけです。陰口をたたいて、それがサタンに使われるということです。他の教会の牧師のことも、絶対に、同じように聞かないで下さい。「もうそんな話は聞きたくないし、やめなさい」と。「それが本当ならふたりか三人の証人を連れてきなさい。」大抵、その人はそれで話をやめます。「ふたりか三人の証人を連れてきましょう。」なんてことは言いません。その人の主観で物を言っているだけです。その人のフィーリングで言っているだけですから、実際にそれが事実かどうかは定かではないわけです。そういったように、そうやったように感じたとか、そういうふうに見えたとか、その程度のいい加減なものなんです。本当にふたりか三人の証人がいるならば、その人は陰口すらたたきません。まずは当人の所に直接行って、そのことをちゃんと告げて、柔和な心で正そうとします。でなければ、ふたりか三人の証人を連れてきます。そのようなことをイエスはちゃんと手続きとして私たちに命じていますし、また柔和な心で正すということもパウロ自身が命じていることですから、聖書に即して健全なクリスチャンは行動するわけです。でも、

不健全なクリスチャンは、聖書を無視して、たきぎ集めをするわけです。火遊びをしたいわけです。で、これは昔からのトリックですけれども、「あの兄弟は、あの姉妹は、あの牧師は、こんなことを言った。こんなことをやった。こんなことを今やっているんです。だから、祈って下さい。」「祈って下さい。」という言葉を使うと、もうそれはゴシップでなくなるように思うわけです。でも、それは昔からのトリックです。「祈りの課題があります。」と言いながら、それはその人の文句である。「祈りの課題です。」と言いながら、それはただのうわさ話。ただのゴシップである。でも、それを「祈りましょう。」なんてことを、「祈って下さい。」なんてことを言うと、それが正当化されてしまうわけです。騙されてはいけません。

で、イエス・キリストという大牧者ですら、非難の的になったということも覚えたいと思います。ルカの福音書 7 : 33,34 にこうあります。『³³ というわけは、バプテスマのヨハネが来て、パンも食べず、ぶどう酒も飲まずにいると、『あれは悪霊につかわれている』とあなたがたは言うし、³⁴ 人の子が来て、食べもし、飲みもすると、『あれ見よ。食いしんぼうの大酒飲み、取税人や罪人の仲間だ』と言うのです。』私たちの主ですら、ありもしないことで悪口雑言言われたわけです。私たちの主ですら、悪く言われたわけです。誹謗中傷されたわけです。非難の的となったわけです。「悪霊に取り憑かれている。」とか、「あれは悪霊の頭ベルゼブルだ。」とか、ひどいことを言われたわけです。「悪魔のしもべだ。」と言われたわけです。ですから、牧師がどんな非難をされてもショックを受けてもいけませんし、驚いてもいけません。で、これは牧師に限らず、すべてのクリスチャンは、皆悪口を言われます。ありもしないことで悪口を言われる。悪口雑言を言われる。でも、その時私たちは幸いだと思わなくてははいけません。『八福の教え』にあります。主も同じように馬鹿にされ、目の敵にされ、そしてひどい言われ方をしたんだと。誹謗中傷されたんだと。だから、私も主に繋がる者として、主に属する者として、同等に扱われたことは、これは幸いなことであると。むしろ感謝すべきかもしれません。つらく感じるかもしれませんが、それは幸いなこととも言えるわけです。

で、そのような牧師批判に対して、チャールズ・ハッドン・スポルジョンは『**見えない目と聞こえない耳で、あなた方の牧会を始めよ。**』という素晴らしいアドバイスをしています。人々の批判に対する一般的なルール。これは、『**見えない目と聞こえない耳で、**』行なえということです。若しくは片目片耳をつぶることと、スポルジョンは言います。どういうことかということ、**伝道者の書 7 : 21** をスポルジョンは、引用して教えています。**伝道者の書 7 : 21** には『人の言うことをいちいち聞くな。』というようなことが書いてあります。まあ、実際に新共同訳ではそう訳しています。人の言うことをいちいち気にするな。なぜならば、スポルジョンは『人々は勝手なことを言うから。』だからいちいち人の言うことを気にするな。**伝道者の書 7 : 21**。これを引用して、「**見えない目と聞こえない耳。これを持って牧会を始めよ。片目、片耳をつむること。これが大事である**」と。ですから、私たちも牧会者でなくてもこれは非常に良いアドバイスだと思いますから、人の言うことをいちいち気にしないように。あなたが何を言われても。また人が言うことに対して、いちいち耳を貸さないように。よっぽどの問題ならば、ふたりか三人の証人が必ず立てられるはずであります。

また、もうひとつ。これも私の尊敬する牧師の言葉ですが、ディートリッヒ・ボンヘッファーという人の、ドイツの牧師です。ナチス・ドイツに対抗した牧師です。殉教した牧師です。ディートリッヒ・ボンヘッファーの言葉で、「**絶えず私の悪口を言い、私を侮辱し、私に対して公然と不正を行い、折さえあれば私を苦しめ悩ます隣人が、あるいは他人がここにいる。その人を見るだけで顔に血が上り、恐ろしく激しい怒りがこみ上げてくる。敵というものは我々にそうしたことを引き起こさせるものである。しかし、その時にこそ我々はよくよく注意すべきである。その時にこそ、私は人間によってではなく、神ご自身によって憐れみを受けたのだ。そして、イエス・キリストは憐れみを与えてくれるこの神のために、死をも引き受けたのだ、**ということ

ろう」と。批判を受けた時、悪口ばかり言われる時、どのように対応すべきか。大先輩たちが非常に的確な、適切なアドバイスを与えてくれております。

で、**20 節**。テキストに戻ってください。『**罪を犯している者をすべての人の前で責めなさい。ほかの人をも恐れさせるためです。**』当然これは文脈上罪を犯している人というのは、長老のことです。一般の信徒のことではありません。何故、長老とか牧師はすべての人の前で、その罪を責められてしまうのか。それは牧師が公人だからです。スポルジョンも「**公人は公衆の批判を予期しなければならない。**」と言っています。公人というのは勿論牧師です。牧師は公衆の批判を予期しなくてはならないと。公人である以上、公人が犯した罪は、公の罪ということです。ですから、公に処罰されるべきだということです。厳しいです。でも、**ヤコブ 3:1**に書いてある通り（『**私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。**』）多くの人が教師になってはいけない。なぜならば教師は格別厳しい裁きを受けるからですと。公人には重い責任が問われるんです。公人の罪は公の場で責められるべきです。水に流すとか、あやふやにするとか、なかったことにする、ごまかすなんてことはあってはいけないということです。プライベートに密かに処理されて良いということじゃないんです。そういうことを迷っているテモテにパウロはハッキリと言うわけです。長老を裁くというのは、これは慎重に行なわなくてははいけないことですし、ふたりか三人の証人がなければいけないことですが、これは大変難しいことです。でも、しっかりと毅然とした態度で、罪は罪として、例え公人だろうと、例え長老だろうと、例え尊敬に値する人だろうと、罪を犯したならば、その罪は明確に処罰されなくてはならないと。教会を聖めなくてはならないということを言います。

21 節に『**私は、神とキリスト・イエスと選ばれた御使いたちとの前で、あなたにおごそかに命じます。これらのことを偏見なしに守り、何事もかたよらないで行いなさい。**』ついつい長老だからと言って、まあ、どうしても力のある人とか、影響力のある人とか、教会の中で大きな存在の人に対しては、偏見を持ってしまいかもしれません。えこひいきしてしまうかもしれない。公平には、公正には裁けないと。分け隔てなく裁けなくなってしまうこともあるわけです。でも、そういう人に対して、そういう弱さに対して、パウロは「えこひいきなく、ちゃんと公正に、公平に、客観的に、判断し、ジャッジすべきだ。」と言っています。間違っても影響力のある長老におもねったり、チャホヤしたり、自分をいつも経済的にサポートしてくれるようなリッチな長老たちに、偏見に満ちた、大目に見るような、不問に付すような、そんな誤った裁きをしてはいけないと言っているわけです。公私混同してはいけないということです。

で、**22 節**。『**また、だれにでも軽々しく按手をしてはいけません。また、他人の罪にかかわりを持ってはいけません。自分を清く保ちなさい。**』“軽々しく”という言葉は、新共同訳聖書では『**性急に**』という言葉が使われています。『**慌ててすぐに**』、又は『**突然に**』と訳すこともできます。まあ、『**軽率に**』という意味でもあります。実際に按手を授けるということは、長老として任命するとか、任職する、牧師に按手をする。教会の働きを担うにふさわしい者として認めて、そしてその働きを担うための権威も与えて、祝福を与える。それが按手ということです。これを安易に、性急に、軽率に、突然すぐに、慌ててやってはいけない。しっかりと吟味すべきだと。慎重に審査すべきだと。時間をかけるべきだということを言っているわけです。監督だとか、長老若しくは執事の資質について、牧師の資質については、**3 章**で詳しく見たところです。それを読む限り、しっかりと時間を使って慎重に審査するように、吟味するように、ということが奨励されてました。で、これはもうひとつ言えることは、按手を授ける側もそうなんですけれども、授かる側も、これも軽々しく授かってはいけない。「按手してあげますよ。」なんて言われて「はい分かりました。どうぞ。」みたいな、そういう按手を受けてはいけないということです。教会にスタッフが足りないから、牧師もひとりやふたり増やしたほうがいいから、「あなた暇そうだし、経験も豊かだから、有能な人のようですから、どうぞ牧師になって下さい。按手します。」とか。「あなたは通信教育で、神学校で牧

師の資格を得たようですから、あなたを按手します。」とか。「結婚式ができそうだから、あなたを按手します。」とか、そういうことはいけないと言っているわけです。実際に按手については、これも旧約聖書から勿論由来を見ることができます。申命記 34 : 9 『ヌンの子ヨシュアは、知恵の霊に満たされていた。モーセが彼の上に、かつて、その手を置いたからである。イスラエル人は彼に聞き従い、主がモーセに命じられたとおりに行った。』また民数記 27 : 18,19 『¹⁸ 主はモーセに仰せられた。「あなたは神の霊の宿っている人、ヌンの子ヨシュアを取り、あなたの手を彼の上に置け。(按手のことです。) ¹⁹ 彼を祭司エルアザルと全会衆の前に立たせ、彼らの見ているところで彼を任命せよ。』このように任命式の時に、頭の上に手が置かれて、按手を受ける、というような儀式が古代イスラエルの時から行なわれていたわけです。で、これは初代教会においても行われた伝統です。セレモニー、儀式です。使徒 8 : 17 『ふたりが彼らの上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。』特に、神の働きを担うためには聖霊が注がれる、聖霊の力と権威が注がれるということが常にセットで語られているということに注目して下さい。ただ、按手礼を受ければ聖職者になれるとか、牧師になれるということじゃなしに、聖霊が鍵です。聖霊に満ちた人、聖霊を受けた人、聖霊の力を帯びた人、聖霊の権威をもって、召しをもって、または賜物を受けて召された人。それが按手を受けるにふさわしい人です。で、勿論具体的にはその人のキャラクターはこうじゃなければいけない。人格の面、内面の面、性質の面、性格の面が、3章で具体的に挙げられていたわけであります。現代、日本の教会では牧師になる儀式として、やはり按手礼が行なわれているわけですが、大学を卒業して、神学教育を二三年受けて、そして二三年いろんな教会で実地教育、実地訓練。牧師候補生として、見習いとして、補教師として経験を積んで、それもやはり最低でも二三年。その結果晴れて試験を受けて、審査を受けて、按手礼を受けたら、牧師になれるわけです。正教師。これが一般的な日本の教会のシステムです。でも、これが聖書的かどうかは、私には言えません。神学校を卒業しなきゃいけないとか、そういうことは一切書いてありませんし、実際にテモテも若い牧師でしたけれども、彼はパウロから按手を受けて、エペソ教会の牧師として、また監督として立てられたわけです。神学教育を受けたから、卒業資格があるから、牧師の試験に合格したから、だから按手を受けられるということではないということです。時間をかけ過ぎるということはないかもしれませんが、むしろ、私はどんどん若い人に主に従って、主にささげて、仕えて、どんどんその奉仕の機会を活かして、チャンスを与えたいとも思います。でも、下手に雇うなり、下手に任命するなり、下手に使ったりすると、ここでは按手した者も失敗を引き受けなければいけない。責任を負わなければいけない。そこには後悔や痛みも避けられないということです。『自分を清く保ちなさい。』という言葉がありますが、これによって自分自身にも影響を及ぼすということです。清い者を任命すれば、自分の清さも保たれます。でも、清くない者を任命すれば、自分の清さも保たれなくなるということです。だから、性急に、軽率に、軽々しく按手をしてはいけないということです。按手をしたら必ず連帯責任を問われるということです。自分の分身ということです。自分と同じスピリットを持って、自分と同じミニストリー哲学を持って、自分と同じ価値観を持って、自分と同じ権威を持って、祝福を与えて任命するわけですから。その人がとんでもないことをしでかしたら、「私は関係ありません。」とはいかないわけです。勿論それぞれが罪を犯せば、それぞれに神が問われることがあります。でも按手をしたら、按手を授けた側にも責任が求められるということです。「あなたが按手したから。」ということ言われてしまうわけです。まあ、それだけ牧師の責務は思いということです。重責だということです。でも、慎重になりすぎて、いつまでも牧会スタッフを育てないで、任命もしないで、按手もしない。そうすると今度はまた教会は小さいままで、また足りないところや限界ばかりで、中々成長もしないということになりますから、これもやはりバランスが大事だということです。

で、23節。『これからは水ばかり飲まないで、胃のために、また、たびたび起こる病気のためにも、少量のぶどう酒を用いなさい。』いきなり「ぶどう酒を飲むように。」なんて言われたら、ちょっと文脈から

戸惑ってしまうかもしれません。でも、実際にこの文脈は長老に対する訴え、非難ということも言われますので、ここでテモテが、もしぶどう酒を用いたならば、「あいつは酒飲みだ。大酒飲みだ。」非難を受ける可能性も出てくるということです。既に**3章**で「監督は酒飲みであってはいけない。執事は大酒飲みであってはいけない。」ということが指摘されていたわけです。にもかかわらず、テモテがぶどう酒を飲むならば、非難は必至である。誤解を生むということです。まあ、実際にこれは嗜むために飲むわけではありません。むしろ、ここでは『胃のために』と目的が医療目的だと言っています。当時はこの少量のぶどう酒を用いて、胃腸薬として使っていたわけです。水が汚染されていて、水割りワインを飲むということも、浄化作用があるということで、広く行なわれていたことでもありましたし、また胃腸が弱い人は少量のぶどう酒を医薬品として用いたと。まあ、薬用酒みたいなものです。養命酒みたいな、何か当時は薬として一般的に使われていたものだったわけです。でも、それでも「ぶどう酒を飲んだ。」ということで、批判される可能性がある、非難される可能性がある。それをテモテはことさらに恐れたわけです。評判が落ちることをことさらに恐れたわけです。なぜならば**使徒 16章**で、テモテは地域においては評判の若者だったと言われています。評判の若者というふうに評価されていたのですが、その評判が却って枷となって、「評判を失いたくない。悪く言われたくない。」そういうことから恐れて、薬としてのぶどう酒を飲まずに、どんどん胃を悪くして、体調も崩して、そこに押し掛かるように長老たちがトラブルを起こして、自分が裁かなければいけない。大変なプレッシャーを抱えていたわけです。ますます胃が痛くなるわけです。ですから、テモテは少なくとも胃弱であって、病弱であって、虚弱体質。そして精神的にも弱い面があった。これは**第2テモテ**からも明らかなように、彼はおくびょうの霊、そのおくびょうのスピリットによって、非常に弱気になっていた、迷いもあった。で、お腹がますます痛いわけです。胃がキリキリするわけです。で、食欲も失い、体力も失い、どんどん衰弱していつてしまっているわけです。それに対してパウロは、『これからは水ばかり飲まないで、胃のために、また、たびたび起こる病気のためにも、少量のぶどう酒を用いなさい。』できれば、私たちは精神的にも強い者でありたいと思います。私はバイブルカレッジにいた時に牧師クラスをとりましたけれども、そこでスティーブ・メイズというカルバリーチャペルでは有名な牧師から、『収穫の時代』という本の中に出てくるとんでもない悪党だった人なんですけれども、その彼が牧師になって有名になってるんですけれども、彼が言うには「牧師は面の皮が厚くなければいけない。なぜならば、牧師は必ず批判の的となるから。」彼も批判されて、スティーブ・メイズという牧師はゲイであるということが地元の新聞の一面に載ってしまって、彼は行く先々で同性愛者というレッテルを貼られて、ありもしないことでひどい目に遭ったと。でも、それでも彼は牧師を続けなければいけないということで、「牧師はとにかく面の皮が厚くなければいけない。打たれ強い者でなければいけない。精神的に薄弱な者では、とても牧会は務まらない。タフでなければいけない。なぜなら、牧師の仕事はタフだから。」そういうことを教えられて、「もう私はじゃあ牧師はできません。」と言う人も沢山現れたわけです。幸い私の皮は厚かったので、牧師として今は続けていけますけれども。スポルジョンもこう言っています。「あなたがたは批判に耐えることができなければならない。さもないと、会衆の上に立つ者としてふさわしくない」と。ちょっと何か言われただけで、もうがっかりするとか、すぐに傷ついてしまうとか、人に言われたことがとにかく気になってしょうがないとか、どう思われるかとか、そういうことばかり気にする人は牧師としてはとても務まらないと言ってるわけです。で、勿論パウロはテモテのことを“わが子”と呼んでいますから、可愛くて仕方がなかったはず。彼が病気ならば、とにかく必死になって祈ったはず。でも、パウロですら、テモテの病気を癒やすことは出来なかったんです。パウロは様々な奇跡的な癒やしも行なったわけなんですけれども、わが子テモテの病気を癒やすことは出来なかったんです。まあ、実際に信仰がないから癒やされないと教える人もありますけれども、信仰があろうとなかろうと、すべてのクリスチャンは癒される。これが神のみこころです。遅かれ早かれと言った方が良いかもしれませんが、すぐに癒

される場合もあります。超自然的に、奇跡的に癒される場合もありますし、死んでから癒される場合もあるわけです。タイミングは主権者である神が決めることですが、でも結果はいつも癒されるということ。これが神のみこころです。癒やされないままで天国に行くことは絶対ないということです。すべての病はイエス・キリストのむちの打ち傷によって癒やされたわけです。これが**ペテロの手紙**にも書いてありますし、**イザヤの 53 章**からペテロは引用して、イエスの打ち傷によってすべての病は癒やされたと。問題はいつ癒やされるかだけです。天国で癒される場合もありますし、地上で癒される場合もある。ただそれだけのことです。テモテはこの時点では癒やされませんでした。パウロも肉体のとげを持っていました。でも、弱さの内にキリストの力が完全に現れる。神の恵みが十分であるということのパウロは経験していました。で、テモテも同じだったと思います。敢えてこの弱さは、すぐに病気になってしまう、ふせてしまう。この弱さは癒やされなくても、これは肉体のとげとして甘んじて受け、キリストになおもすがっていく。神の栄光が最大限現されるならば、弱いままでいい、弱気のままでもいい、ということです。でも、医薬品は使って良いわけです。実際に神様が癒やされるのは、祈りを通してだけじゃありません。祈りが癒やすんじゃないんです。信仰が癒やすんじゃないんです。勿論、薬や医者癒やすんじゃないです。癒やすのは神ご自身です。**出エジプト 15 : 26**に「わたしはいやす者。ヤーウェ・ラファ。いやす者」その主が祈りを用いて、信仰を用いて、薬を用いて、医者を用いて、又は奇跡を用いていやす。ただそれだけのことです。タイミングは主がお決めになるわけです。でも、いやすのは主です。すべての主を信じる者はいやされる。なぜならば、イエス・キリストがすべての病をその打ち傷をもってすでに癒やして下さっているからです。だから私たちはオープンに、祈っても癒やされなければ、薬を飲んでも良いわけです。医者にかかっても良いわけです。それでも癒やされなくても、私たちは絶望することはないということです。必ず癒される。今癒やされないだけ。いつか必ず癒やされる。ですから、皆さんも胃が悪い人は、祈っても癒やされなければ、今日はぶどう酒を飲むこともなく、太田胃散とかキャベジンとか、そういうものを飲んだって良いんです。医者にかかったって良いんです。それを不信仰とは言いません。でも、もし薬ばかり頼るならば、何かすぐに病気になったらすぐに薬飲まなきゃ、すぐに医者に行かなきゃ。これは不信仰です。まずは主に祈るべきです。あとは主に任せるだけです。方法は主が決めて下さいます。

で、話を戻しますと **24 節**で『ある人たちの罪は、それがさばきを受ける前から、だれの目にも明らかですが、ある人たちの罪は、あとで明らかになります。』**25 節**『同じように、良い行いは、だれの目にも明らかですが、そうでない場合でも、いつまでも隠れたままではあります。』まあ、文脈で捉えて頂きたいと思います。テモテはもし少量のぶどう酒を飲むようであれば、これは非難されるかもしれない。誤解されるかもしれない。悪く言われるかもしれない。「テモテはぶどう酒を飲んでるんだ。とんでもない奴だ。あいつは大酒飲みだ。牧師のくせに。」と、非難されるかもしれないわけです。でも、真実は神が知っています。人はいろんなことを言います。勝手に思い込んで、勝手なことを言います。「人がどう思おうと、人がどう評価しよう、人がどう裁こうと、人がどう決めつけよう、人がどう文句を言おうと、悪口を言おうと、そんなことをあなたは気にしてはいけません。」テモテはそれをずっと気にしていたわけです。人にどう思われるか、何を言われるか。悪く言われたくない。評判を落とすたくない。ワインを飲んだら、薬のつもりで飲んでるけど、でもこれを大酒飲みだと言われてしまうかもしれない。薬を飲んだら、医者にかかったら、不信仰と言われてしまうかもしれない。**MGF**のメンバーは皆信仰だけで癒やすんだとか。薬なんか飲んじゃいけないんだと。そんなこと言われたらどうしようとか。そんなことを間違ってもあなたが思っているならば、それはとんでもない間違いですけども、気にしてはいけません。ということです。たとえそれを言っている人があったとしてもです。気にしてはいけません。**箴言 29 : 25**には『人を恐れるとわなにかかる。しかし主に信頼する者は守られる。』とあります。人に何を言われても、どう誤解されても、どう悪く言われても、ありもしないこと、根も葉もない事で悪口雑言言われても、一々気にしないで、

恐れなくて、主に信頼して下さい。そうすれば、主があなたを守ってくれます。下手に自己弁護する必要はありません。又は、反撃する、攻撃する必要もありません。言い訳する必要もありません。人の評判を気にするようなちっぽけな生き方は絶対にしないで下さい。前にも話した覚えがありますけれども、人がどう思うか、人がどう評価するか、評判ばかり気にしている人の人生は本当にちっぽけなんです。どのぐらいちっぽけかと言うと、あなたの噂をする人の脳ミソの中程ちっぽけなんです。あなたが人の評価を気にして生きているということは、あなたはその人の脳ミソサイズの生き方しかしていないということを言っているんです。そんなちっぽけな生き方をしてはいけません。これは英語の聖書では非常に興味深いことなんですが、ピリピ 2:6 に、欽定訳の訳のところに『イエス・キリストが神でありながらも、神であることをやめないで、捨てないで、神の本質を捨てないで、私たちと同じ人の姿をとって、この世に下って下さったという、その記述の顕否について語っているところです。そこで、欽定訳聖書で使っている言葉は英語で”no reputation”、”reputation”というの『評判』という言葉です。ですから、イエスは“ノー評判”、評判を捨てたんです。評判を持たなかった。若しくは“評判を否定した”とも言えるでしょう。人からどう思われようと、イエス”no reputation”評判は全く気にも留めなかった。評判を捨てたということです。これがイエス・キリストの内に見られる思い、マインドです。私たちもこの同じ思いを持つ必要があります。”no reputation”人の評判なんて気にしてはいけません。どう思われるか、どう言われるか。恐れなくてはいけません。むしろ一番気にしなくてはいけないことは、一番恐れるべきは、私たちの主の評価です。主がどう思われているのか。主がどう評価して下さいなのか。主がどのように言って下さるのか。勿論主はあなたのことを非難しません。でも、「よくやった。良い忠実なしもべだ。」と言われるかどうか。あなたを裁く、あなたを馬鹿にする、あなたを^{ひな}貶したり、見下したりすることは、確かに言われませんが、でも褒めてもらえるかどうかは、これは別問題です。キリストの御座の裁きに私たちは必ず立ちます。その時に私たちはこの地上において、キリストの御名のために行なったこと、神の栄光のために行なったことが裁かれます。評価されます。キリストの裁き、キリストの評価、キリストの私に対する評判。これが一番大事であるということです。その他の人の評判はどうでもいいことです。この、人の評判に多くのクリスチャンが振り回され、萎縮したクリスチャン生活を送っています。ビビりながら、恐れながら、伸び伸びとできないでいます。どうどうと大胆に動けないでいます。これは非常に残念なことです。まあ、最後、そのことを皆さんに考えて頂いて、もしかしたら皆さんもテモテのように縮こまっているかもしれません。つつい「あの人にこんなふうと言われるかもしれない。こんな扱いを受けるかもしれない。評判を落とすかもしれない。悪く言われるかもしれない。そんなことばかり気にして、中々大胆になれずにいるならば、神が正しいとおっしゃることをできないでいるならば、是非もう一度奮い立って欲しいと思います。

で、次回 6 章です。これは教会の中よりも、特に教会の外。この社会においての神の働き、ミニストリーについて私たちが担っているもの、私たちが召されている働き。これがありますので、是非また次回も楽しみにして頂きたいと思います。